



330  
220

0 1 2 3 4 5 6 7 8 9 5 30 1 2 3 4 5

始





特20  
160



若女春來



之伸







# 若い女に春が来た

## 他見男さん招待

「貴方妙な手紙が来てゐますよ、恰度お出掛けになると直ぐ速達つて放り込んで行くんでせう、何んだらうと思ふたら手紙よ、お机の上にありますから御覧」

外から歸ると妻は斯う云ふ。

妙な手紙?! 己れは服も脱がずに其の儘書齋へ飛んで来た。封は既に妻に依つて破られてあつた。

1 「拜呈、益々御清祥奉賀上候。



扱て突然不寐にて失禮に候へども急にお手紙が差上げ度相成り候儘一書を呈し候。實は一昨年頃より拙宅小妻(卅五歳)小娘(十八歳)が頻りに貴方の御作を讀みては打ち興じ居り候事度々有之候も小生は一向等閑に附し貴著を顧みざりし處近頃になり經濟界の慘狀先輩も知友も何處も彼處も斯く云ふ小生も大打撃の爲め頓と面白く無き事今昔の感に堪へぬ有様にて就床の節はせめて頭を休養さす可く肩の張らぬ讀書を致し居り候處、妻や娘に勸告を受けてお恥かしながら初めて貴著を手に致し候處、當年四十五歳の禿爺たる小生の感興を惹く事限りなく、抱腹思はず大笑、時々家人を驚かせ居り候、亦妻娘より、だから早くお讀み遊ばせば良いのに杯との連發を喰ひ申候。昨夜は名古屋にて「君と別れて松原ゆけば」を求め寢臺にて濱松邊りまでに讀了の有様。俄かに他見男さんの

大信者と相成り申候。さア斯うなると書物丈けでは承知出來ず、急にお顔が見度なりお話も仕度なり申候儘、是非最近御都合の良き日を一夕御割愛願ひ申度、どうか御承知に預り度候。大抵毎日白木三越又は地下室で御晝食の赴拜承仕り候。十七日の正午に白木屋の筋向ふの元大工町春日と云ふ大阪料理にて初見參を致して、そして一夕御都合の良い時日を其節窺ふ事に仕り度、甚だ恐縮に候へ共先づ十七日の正午御都合如何を此の狀御披見の上京橋二二△△番井村(假名)へ御返事賜はり度、右お手数煩はし候。貴下は若しや小生を老人臭いお爺さんの様に思はれ眉をしかめられるかも知れぬが、それは御心配御無用、要するに四十五歳位の人と思はれば確かに誤り御座なく候。面白い奴に會ふのだとの感興を以つて是非御光來願ひ度候。馬鹿に手紙が長く相成り、餘は拜



顔の節、萬々何卒〜奥様やお嬢さんに宜しく御傳聲下されたく候。

拜具。

井村音藏(假名)

奥野他見男様 侍史

読み終ると同時に己れは思はずニンガリ微笑した、改めてバツと書簡を  
披けて字を見ると成程所謂四十五歳らしい手だ。今度は己れは状袋を手  
にして裏を返した。東京府下大森山王〇〇〇番地、井村音藏と印刷し  
てある、而かも其の横に電話長大森〇〇〇番とある、直覺的に大分こり  
や大きな家の主人だなと思ふた。猶又手紙の文句の中の電話番号を見る  
と京橋二二△△番で矢つ張り井村と云ふんだ。して見れば大森の方が宅  
で、東京の方は店であるかも知れない、店にしる、又何方が本宅にし



ウニ逢つて  
う伸ふ



ろ、堂々と井村と名告つて而かも雙方に悠然と電話を構へてゐるからには必ずや相當の人士に違ひない。その相當の人士が辭を低うして斯う頼まれるからには己れとしても其れに對する禮儀を考へなくちやならぬ。

「貴方何うなさる？ お逢ひなさる？」

「ウン逢つて見る」

「屹度面白い方に違ひないことよ」

「先方も左様思ふてるかも知れぬ」

と、云ひつゝ何氣なく又狀袋を手を取つて、

「オヤ十五日に出したんだナ。十五日なら昨日だ。それが速達で漸つと今朝着いたのかい？」

「え、十一時頃でしたよ」

「フーム」

と、云つた儘己れはコクリとした。先方では十五日に出したんだから、矢つ張り十五日に此の手紙が己れの手許に着いてると思ふてるかも知れない、然るに己れの見たのは十六日である。しかも晩である。先方では必ず早ければ十五日裡に、遅くて十六日中には己れから返事があることとさぞや待つてゐた事だらうと思はれる。そして今まで返事がないのでさぞや失望したことであらう。失望よりも禮知らずの様に思ふた事であらう。こりや一刻も早く通じなくちやと、己れは雨が横吹きに降つてゐたけど、今から電話をかけに外へ行くと云つた。妻は「まア此の雨に」と一應留めたけど、己れが此の譯を口早に云ふて聽かすと、「そりや左様ね」と一も二もなく賛成して、暗い中を下駄箱から足駄を探して並べて



呉れた。

「父ちゃん、どこへ行くの？」

静子ちゃんは誰よりも一番可愛がつて呉れる父が今外へ出ようとするのを見て気が気でなかつたか、斯う訊ねた。

「父ちゃんはね、一寸他所へ」

「静子ちゃんも行く」

と静子ちゃんは父さん失敬だぞと許り、駄々こねた。

「でもね静子ちゃん、雨が降つてるでせう。雨が降らなかつたら静子ちゃんを連れて行くんだけど」

と、云ひながら早くも遁れ出ようとした。

「静子ちゃんも行く、ウわア」

と、彼女は泣き聲立て、足をジタバタさせた。

「ぢや貴方も止しないな」

と、眼で後にしたらと云はぬ許りに眼配せする。

「行く、行く。母ちゃん不可ない。行くーウ」

と、静子ちゃんは母アちゃん餘計な口出ししなくてもいいと許り足をトン／＼させた。

「オ、行くよ、行くよ。」

と、己れは此の碌でもない者を我子なればこそ父ちゃん／＼と云つて呉れるのだと一種云はれぬ感激に打たれて「さアおんぶなさい」と脊中を見せた、静子は嬉し紛れに獅噛み付いた。

家を出て一町許り、其處に酒屋がある。いつも電話は其處で借りてゐる



んだ。静子を下におろして幾遍となく指示された番號で掛けて見たが、何うしても出なかつた。己れは交換手に「引つ込まないで早くつないで下さいよ」と三度も呶鳴つた。が、それでも出して呉れなかつた。今度は火の様になつて「どうしたんだッ」と素盞鳴命みたいな聲で威し附けて遣つた。「幾程呼んでも出ないんですよ」と交換手は此方にも同情して下さいなと云はぬ許りの聲出した。「そんな事はないッ」と己れはまだ餘憤を溢ぼした。けれども依然として梨の礫であつた。

で己れも考へた。こりや夜は屹度誰もゐないに違ひない。して見ると店か商會か或は會社か。それで皆變五時頃引いて了つたんだらう。だとすれば交換手を無理に責めると云ふことは責める方が間違つてゐる、と根が悟りの早い性だから、これぢや幾程掛けたつて駄目だと思ふので、

その儘「静子ちゃんおんぶ」と悄悄歸つて了つた。

翌朝再びかけた。御主人は？ と訊くと、只今お出かけ中ですが、どなたですかと云ふ。奥野と答へると、あッ左様ですかお返事を聽いて置いてくれと云ふお話でしたからと、取次の聲だ。ぢや參りますからと云つてましたから、と傳へて下さいと電話を切つて了つた。

家へ歸ると、妻が、

「貴方は餘ッ程美男子の様に確信してゐらつしやるけれど、近頃そりや悪くなつてよ。永年連れ添ふてゐる私が斯う申上げるんだから、何より確だわ。だから先方の方は屹度なんだ此麼顔かと失望してよ。再考の餘地がありますねえ」と云ふ。己れは己れの顔が近頃大分品質下落したと云ふことは認めるに躊躇せぬが、之も年齢の故だから仕方がないと諦め



てゐたものゝ、今眞正面から親愛なる妻殿から斯う振り翳されると、ツク／＼淡路島通ふ千鳥みたいに悲しくなる。

「ねえ貴方、私の云ふことが嘘だと思召したら一寸鏡をこらん」  
己れは鏡に對した。

「そんなに醜いことは無いぢやないか」

と、己れは躍氣になつて云つた。

「貴方は何うして左様自惚が強いでせう。正直に云ふから悪かつたら御免なさい。私は貴方と一緒になつて、貴方を美しい方だ立派な方だと思ふた事は一度もありませんよ。たゞね時々可愛くなることがある

と、まア素敵だわ！ と讚美しましたけど、ありや本氣で云つたんぢやないんですよ。それを貴方はオホンエヘンと逆上せ上るんですもの。私

し内心ちやんちやらだつたのよ。お氣に障つたら御免なさい」

己れは又淡路島通ふ千鳥顔した。

「でも仕方がない。行くと云つたからにや行つて来る。先づ吉例に依つて髭でも剃らうか」

「家で剃るよりか理髪店へ行きなさいな。その方が何うしても隅から隅まで剃つて呉れますから、今みたいな曇り勝ちなる旅の空の様な顔も、大分此の日天氣晴朗顔になつてよ。ねえ左様なさいな。妻として他人に少しでも良人を立派な方だと思はれたいのは其處は夫婦の情愛ですもの！！」

アレー夫婦の情愛だとさ、アレー。

カラーを新らしく代へて玄關へ出ると靴が昨日の雨で泥だらけだ。今更



磨くのも臆劫だつたので、斯うした儘を履いて行つたら「茲が他見男さんの飾り氣の無い所だ、天真爛漫な所だ」と却つて讚美せらるゝ點かも知れぬと思ふて、構はず足を突き込んで、今しも出掛けようとする、妻は素早く之を見付けて、

「貴方が此麼靴を穢してゐらつしやると、屹度妻君の至らぬ故だと、私が笑はれるぢやありませんか。チーッとしてゐらつしやい。動いちや不可ませんよ」

と云ひながら、刷毛を取出してバツ／＼「さ好う御座んすよ!!」途々己れは鼻と唇との間の髭の中に堆高くなつてゐる傷に小指を當て、此の傷が目立ちやしないか知らと、小首傾けては歩いた。先日のことである。己れはもうすんでのことと南無阿彌陀佛になりかけ

た。それは己れの一點非難なき眉目秀麗な顔に（妻あつちへ行つとれ）、鼻の下にポツリとした小さい腫物が出来た。オヤ變に痛いぞといぢつてゐると、物の數時間も経たぬ裡に顔一面脹れ上つたので、驚いて醫者へ駆け付けて診て貰つたら面瘍だと云ふ。そしてもう二時間遅れたら貴方の命が無かつたんですよと、己れの膽ツ玉が飛び上がる様なことを云つてから、早速切開しますとの宣言だ。己れは痛いことは何んとも堪へるが、此の秀麗な景色に永古不磨の傷を附けられては再び他見男さん浮ぶ瀬がありやしないと思ふて、どうか慈悲ですから切ることだけは許して下さいと願つた。それぢや命が奪られますからと急ぎ込んで、さア命が大事か、顔が大事かと醫者は詰め寄つた。己れは命も惜しい顔も惜しいと云つたら、そりや慾張り過ぎる。さアもう時間が切迫して來ま



したぞ。どつちだ〜と益々追窮するから、己れは涙を吞んで命が惜しいと云つた。それぢや切りますよと寢臺の上へ寝かし、ピカツ〜と小刀を眼の先でチラ附かせた。

局部魔酔の後、あはやその小刀が一閃顔に觸れようとする時、己は「一寸待て下さい」と其の手を堅く止めて、傍にゐた看護婦を呼んで「一寸鏡を見せてくれ」と頼んだ。看護婦は幸ひ自分の持つてゐた小さい鏡を懐から出して、「傷を御らんになるんですか」と云ひながら渡して呉れた。己れは其れを受取るが早いか、傷なき最後の他見男さんに面會も之れ限りと許り泌々と見入つた。すると顔は全で親子井みみたいに脹れ上がつてゐて、眼は何時しか鯨の様に細くなつてゐる。何んちう情ない顔付だんべと我れと我顔に愛憎盡かしたが、それでも之が無垢の他見男さ

んだと、一入なつかしく又悲しく、もうすんでのことにいゝ年齢をしなからオン〜としやくりあげるのだつた。

「幾程口惜しくても仕方がありませんよ。さア、さア」と、醫者は急ぎ立てた。鏡を看護婦に戻した己れは今ほと觀念の眼を閉ぢた。それから二週間ばかり、己れは苦痛と悲觀の爲め煩悶した。斯くて傷は癒えたが、切開の後には果して残つてゐる。己れは今其れを髭で旨く蓋ふてゐるから一寸見た所では解らぬが、注意して見ると其の部分の髭が淡くなつてゐるから、氣が附かれるかも知れないのだ。忘れもせぬ此の傷で病臥の最中、淑女畫報から寫眞を撮りたいと云つて來たのに、己れは「今此の通り繻帶してゐるから、武士の情けがあるなら許してたべ」と、懇願した所、「ぢや止ませう」と立てかけた寫眞機をバタ〜



と疊んで呉れて先づいゝ鹽梅。何故もつと早く、秀麗なる他見男さんの時に來て呉れなかつたんだらう。

面瘍の話が出た序でに、面瘍の話をするが、己れの友人の妻君で美人で評判な草野夫人がある日神保町へ買物に行つた時、顔にホンの蟻みたいな傷が出来たので、痛くてく堪らず其れをいぢりく聽て買物も濟まじ、いざ歸らうとすると俄かにおかめ見たいに脹れ上がったので、驚いて近くの醫者へ駆け付けた所、直ぐ入院して直ぐ切らなくちや命に係はりますと、その儘歸宅もさせず其の儘入院させて了つたと云ふ。「面瘍と云ふもの程早く命を奪るものは無いから、若しぶくくと脹れたら直ぐ醫者へ來なくちや、又顔の傷は滅多にいぢつては不可ない、いぢつたら屹度面瘍になるか何かになるから我慢して放擲しにして置いたら其の裡

消えて了ふから」とはお醫者さんの御注意だ。他人事でないから己れは特に書き添へて置く。話は飛んだ側路へ入つて了つた。

◎

理髮店の前へ來ると、戸がビタリと閉まつてゐる。オヤツと見ると「毎月十七日休」と書いてある。己れは暫らく黙つて見詰めてゐた。

えゝッ此麼事だと知つてゐたら何故己れは家で剃刀を當てなかつたんだらう。あゝ知らなんだ。十七日休とはわしや知らなんだと己れは身體を揺ぶつて悔しがつた。

さて何うしたものだらう？ 斯う思ひ耽りながら、とぼくと電車路へと歩いた。理髮店の十七日休は男に子供が出産ぬと同様永久不滅の眞理であらねばならぬ。情けない眞理もあるものだ。此麼眞理があるものだ



# 理 髪



から己れは此の通り日もあらうに肝心の今日此の日髪ボヤ／＼である。  
 さて其れぢや外の理髪店へと思ふて見たが、矢つ張り此の眞理がブラ下  
 がつてゐる以上、動かすことが出来ない。

ふと左様だとニンガリ笑つた。  
 何人も白木屋の食堂へ入つたものは壁に次の如く張紙してあることを知  
 つてるだらう。

「當店に理髪店の設備あり、理髪券は此の食堂にても代用せらる」と。  
 それを今思ひ出した。白木屋の理髪店は白木屋が休みでない限り、「へい  
 ゐらつしやい」だらうと思はれる。イヤ屹度然うだ。こいつあ締めた  
 ぞ。いゝ所へ氣が附いたと己れは急に元氣回復した。

電車に乗つた。電車から下りた。



白木屋の五階まで昇降機でスーッと上がる。下ろされた所でヒョツと首をあげると如何にも理髪美顔とある。ツカ／＼と入つて行つて覗いて見ると、何うだいな客が四人も待つてゐる。一人が假りに卅分かゝると見ても理髪人が二人しかゐないから二時間はかゝる。時計を出して見ると約束の正午までには卅二分しかない。こりや駄目だと己れはウンザリして又出て了つた。

斯うなると考へ込む餘裕がない。己れは無二無三と許り近くの〇〇銀行の友人を訪ねて「誰か剃刀を持つてゐる者はゐないか」と尋ねた。

僕は持つてゐると友人は答へる。ヤツ有難い一寸貸して呉れと、其れから續いて石鹼やら、紙やら。

見る／＼裡に田子の浦ゆ打ち出て見た富士よりも秀麗になつた、どうだ

いソラ。理髪店へ潜れなかつたのは成程残念千萬だつたけど、斯うして己れが最善の努力を盡した結果から見や大した違ひはない、オウ鮮かなり他見男さん!!

指定の春日と云ふ大阪料理の家は白木屋の筋向ふと書いてあつたので、筋向ふらしい所を探す。無い。仕方がないから車夫に聞いた。そりや白木屋の横ですよと教へる。どうも有難うと念入りにお辭儀して、横町を尋ねたら其塵家は影も形も無かつた。いま／＼しいから其の車夫に「失敬なッ」と嘔鳴つて遣らうと戻つて來たら、何時の間にか其の姿が見えなかつた。

漸つと分つたのが丸善の手前横町と云ふんだつた。行つて見ると如何にもある。玄關へ入つて行くと、品のいゝ女中が控へてゐた。



「井村さんと云ふお方がゐらつしやいますか」

「ハア先刻からお待兼で御座います。どうぞ」

と云ふ。それぢやと案内につれて二階へ上がつて行く。

見ると黒のテーブルを控へて、でつぶり肥えた人物が悠然と座つてゐた、己れは直覺的に井村と云ふ人は此の方だナと思ふ間もあらせず、先方から聲かけて、

「やアよく被居いました、さア、さア」

と、上座へ手が導いた。遠慮のない己れは「では」と一二もなく其の方へ進み、改めて執方も聲を揃へて「始めてお目にかゝります云々」と挨拶を交はした。

「暑う御座んすな」と先方が。

「やり切れませんな」と己れが。

それから色々話が續いた。

「何うしてあんなに面白くことが書けますか？ 不思議ですなえ」

「何うしてですかア」と答へる言葉に困つたから己れは首を抱た。

「貴方はお國は金澤ですな」

「よく御存じですな」

「えい、そりやもう」と大きく聳えながら、

「泉鏡花君も金澤ですな」

「左様です、それに三宅雪嶺さんも」と附け加へた。

「三宅さんも、ホウ」

と初耳と許り珍らし相。話はそれから色んな文人に及んだ。己れは漸々



言葉を交はしてゐる裡に、驚いたことには此の人が非常な讀書家であること、あらゆる作者の作物によく眼を通してゐること、そして尾崎紅葉始め知名の文人と極く知合のこと、更に驚く可きことは目下掲載中の甚大新聞の小説のモデルの一員であることである。

「仲々お詳しいんですね」

「え、然し斯う云ふ具合に文人の方をお呼びしてお話を伺ふのは貴方で四人目です。一人が尾崎紅葉、一人は泉鏡花君です、も一人ありましたが亡くなりました。私みたいに斯う云ふ具合に貴方に逢ひたいと云ふ者がゐませんか」

「随分ゐます。然し大抵家族からとして來ますね」

「お出かけになりますか」

「え、男振りの悪くならん裡に見て置いて貰はなくちやと差支へない限り出かけますよ。ハツハ、」

「ハツハ……」

そこへ女中が遣つて來たから、己れは手拭を浸して大急ぎで持つて來て呉れと頼んだ。どこだ〜と此の家を探しあぐんだ故か、家へ入ると同時に玉なす汗がポタリ〜と顔から雨だれみたいに落ちて來たので、平生いくら暑くてもハンカチを持つて歩くことの大嫌ひな己れも到頭我を折つて頼んだ。女中はハイと持つて來た時には己れの顔は汗の爲め全でざくろの様になつてゐた。

「サツと冷めたいので拭いた刹那の心よささ！」

己れの弟の話も出た、妹のも出た。今度は「私の家内も娘も大の他見男



さん信者ですよ」と云つて今度は先方の奥様とお嬢さんの話が出た。

お嬢さんは僅つた一人娘、だから両親が可愛がり過ぎた爲めか兎角身體が弱かつた。これぢや大變、勉強よりも先づそれ健康にありと音藏さんが總かり心配して、學校を強いて退かしめ、何うかして丈夫にする工夫がないかと考へた擧句、もし一分脊が伸びたらオルガンを買つてやる、若し目方が五百匁ふへたらピアノを買つて遣ると云ふ具合に體育を奨勵した。斯うなるとお嬢さんも一生懸命である。庭を飛んだり、散歩に駆けたり、「そらお父さん一分伸びましたッ」とオルガン。今度は御飯を鰹腹喰つて「そら五百匁」とピアノ。

「お蔭で近頃全く丈夫になりましたよ」

と、音藏さんカラ／＼と笑つた。

己れは東京にゐて大阪料理を喰ふのは始めてなんだ。孰方かと云へば日本料理は餘り好きぢやないんだ。一つは酒を呑まぬ故でもあらう。

然るに今此の家へ来て、出される料理も、出される料理も、天下の珍品と思はれる位旨かつた!! 此處に旨いとは思はなかつた。己れは急に日本料理が好きになつた。

井村さんと己れとは一見舊知の如くなつた。

「その裡是非家の方へ遊びに来て下さい、今日も妻や娘がお父さん他見男さんに逢ふなんて羨しいわと本當に羨しがつてゐましたから」と云ひながら「時に一つお願ひがあるんです？」

と、音藏さん改まつて云ふ。

「何んですか？」



「實は娘が私が出るとき、ねえお父さん他見男さんと是非寫眞を撮して来てと云つてましたから、一つ白木屋の寫眞部へお供して頂きたいので」

とある。己れは笑つた。

「一人娘の願ひですからハツハ、」

と、親父無性に娘可愛いらしい。それには己れも断はり兼ねてそれぢやと立上がつた。

白木屋の寫眞部で己れは如何に鏡に向つて念を入れたか、それは事新しく云ふまでも無い話である。たゞそれ弓矢八幡御照覽あれ御守護あれ。無事に撮し終つて最早お別れしようとする、

「貴方には静子さんと云ふお子さんがありますね。お幾つですか」

「四つです」

「それぢや何か一つお土産を」

とある。己れは固辭した。

「私の娘には他見男さんの寫眞と云ふお土産が出来ましたから、今度は貴方の娘さんにお土産が無くぢや」

と、井村さん聽き入れなかつた。

折角の御好意無氣に断はるも野暮だと思ふて、其の儘玩具部へ随いて行く。

キュービーの假面とお太福の面と、お猿さんの繩登りの三つが静子の爲めに購はれた。静子は屹度「うれちい、うれちい」と座敷中を飛び廻つて嬉しがることであらう。



二人も愉快に逢つて、又愉快に別れた。己れは「禿頭どころぢやない、なんて面白い、そして頭腦の進んだ人だらう」と感に入りながら、ここに家路へ足を向けた。

### 三越の食堂で

三越の食堂へ入る度に思ふ。

そして又飛んだことをして呉れたものだと思ふ。

己れは殆んど隔日の様に三越の食堂で晝飯を喰ふ、一人の時もあるが大抵倉舗君と一緒だ。先日倉舗君と二人で出かけた。その途中己れは幾遍となしに帽子を脱いで見せ『どうだ素敵だろ』と云つては自慢して見せた。抑々この帽子が今此の話の種なんだ。

今年の春である。己れの可愛がつてゐる女學生二人が「他見男さんは本當に立派だわ、脊は人並み優れて高いし、眉毛と云ひ眼と云ひ鼻と云ひスタイルと云ひ難の打ちどころで無い、但し一つ丈け他見男さんに似せ



ぬ事がある、帽子を御覽リボンが汗しみだらけぢやありませんか」  
と云はれた時に己れは思はず苦笑して黙つて帽子を脱いで見た、成程汚  
ならしみだ。然し己れは買はなかつた。

所が次に又二人に遇つた時彼女等は異口同音口を揃へて「オヤ他見男さ  
ん彼れ程申上げたに未だ帽子をお買ひなさらなかつたの、その帽子は本  
當に他見男さんの權威を傷けてよ、早くお買ひなさいな、折角の貴公子  
が代無しぢやありませんか」

己れは又帽子を脱いで見た、そして苦笑した。けれども何故か買ひたい  
と思はなかつた。兎もすれば淑女令嬢にモテたがりの己れだ、而かも  
二人の女性己れには無くてはならぬ最愛の小さいお友達だ、彼處へ入  
りたいと云へば彼處へ行き、此處へ入りたいと云へば此處へ入り、殆ん

ど彼女等の意志が通らぬことが無い程に可愛がつてゐる、その可愛がつ  
てゐる連中が一二もなく己れの顔を見ると氣にする帽子を何故己れは買  
はないんだらう、自分ながら不思議で堪らない。

家でも妻が己れが外へ出ようとする度に、帽子を持つて見送り旁々「貴  
方こんな汚ない帽子を被らないで一つお買ひなさいよ」と屢々忠告して  
呉れた、己れは相變らず苦笑より外に答へるものが無かつた。

次に又大學の己れの弟も、一緒に歩いてると定り文句の様に己れに向  
つて「汚ない帽子ぢやないか、どうして其麼帽子を被つてゐるんだ」と  
半ば嘲笑的に己れに面と突喊して來る「なアに」と云つた限り己れは千  
遍一律苦笑を洩らす外何うともしなかつた。

何故買はないんだらう、それに就いて己れは己れの心に尋ねて見た、漸



# 千遍一律

乙卯

苦笑  
涙  
す外  
い  
し  
か  
か



次詮索して行つた。漸つと分つた、己れと云ふ男は足の裏からも頭からも顔からも少し熱いとなると直ぐ汗を出す悪い癖がある。だから幾程新しい帽子を買つたつて買はなくつたつて、其變性分の持主だから、被つて二日か三日経たない裡に屹度又々汗でリボンを汚なく穢して了ふだらうと思ふのだ。現に己れは最初二女學生からの忠告があつた時に去年の暮買った許しの帽子だから又買ふのも躊躇して、人知れず銀座の裏町の某店へ行つてリボンを新らしいのと代へて呉れと頼んだ、ところが其處の主人餘程親切氣のある男と見えて「なアに之は裏返しした方が宜うござんすよ取代へる程ではありません」と忠告して呉れたので、それぢや裏返しして呉れと云つて裏返しして貰つたら、成程全で新物そつくりだ、それが二日程経つと何時の間にかやらしみだらけ、偕こそ二回目に



彼女等に遇つた時さへ「まア相變らず汚ない帽子を」と、又も云はれたんだ。して見て考へると幾程新しい帽子を買つても、一二日の内に又又しみが出たら、その次に彼女等に遇つた時又々「まアあれ程申上げたに未だ買はずにゐるの？」と、出ることは分り切つてゐるんだ。要するに買ったも買はないも同じいことになつて了ふんだ。どうも買はない原因は其處にあるらしい。

ところが或日二三人の友人が集まつた場所で、「己れの帽子は何うして斯う汚れるんだらう」と顔を顰めて見せると、その内の一人が「僕も其の通りだつた。貴方の帽子の裏縁は布でせう？」と云ふ、見ると如何にも布だ。

「布ぢや幾程新しいのをを買になつても同じですよ。僕のを御覽なさ

い、僕も最初布でしたが皮に代へました裏縁が皮だともう／＼汚が表へにじむことがあります」と云ふ成程左様か、そんなことは從來少しも氣が附かなかつたと始めて合點行つた。愈々こりや早速裏に皮附きの新調物を奮發しなくちやならぬぞと思ひ／＼其の日電車に乗つた。そして己れ見たいに帽子のリボンに汗をにじませてゐる連中が居るか居ないかと試みに漁つて見た。ところが如何にも點々御座るわ、御座る。但しその御座る連中の顔を見ると孰れも労働者か又は安月給取り許りだ、所謂額に汗して働く顔付ばかりだ、物の分つたらしい顔付の帽子を見ると塵一つない、況んや汗にじむなどと云ふ不埒に於てをや。

それに氣が附いて己れは思はず自分ながら自分にウンザリして了つた。屹度己れ自身では氣が附かなかつたが、他の者から己れと云ふ人間を見





たら、矢つ張りしみのある帽子を被つてるから彼は屹度労働者か又は安  
 月給取に違ひないと思つて従来己れの顔を見詰めてゐたことであらう、  
 この貴公子がこの勿體振り屋が、あゝ何んと口惜しいことだらうと、斯  
 う思つたが最後己れは突然電車から帽子を手に持つて飛び下りた。そし  
 てスタコラと大急ぎで丸善へ向つた。己れは年來帽子は丸善より外で買  
 はないことにしてゐる習慣になつてゐるんだ。ツカ／＼と入つて、帽子  
 部へ行き、あれよ之れよと吟味し、聽て如何にも軽いそして如何にも又  
 形のいい、一點非難の打ちどころも無い、それに頭に載せた調子が馬鹿  
 に宜いの見附けたので、もう之に定めたと許り、  
 「之れ幾程？」と云ひつゝ、財布を出した。

41 「△△圓です」



と番頭は平気で云つた。

「△△圓？」

と己れはビヨンと飛び上がる程に驚いて唾をグツと呑んで聴き直した。

「え、少しも高う御座いますが、倫敦から昨日着いた計りの極上です、之れ以上の未だ御座いません」

己れは兎ても其れ丈の金が此の財布の中にあり相にも思はれなかつたので、急に財布を引込めて、「待てよモ一遍検査して」と聞えよがしに云ひながら大鏡の前へ行つて、更にモ一度被つて見、「何んだか少し小さい様だ、どうも具合が變てこだ」と脱いたり嵌めたりすること一しきり、

「も少し變つたものが無いか」

「ハアそれぢや此方へお出下さる」

と、云はれたので、ヤレ／＼と漸つと一道の光明を見出し本當に今の帽をつたら己れの洋服みたいな値段だと、口から泡ふきながらさて新たに取出されたのを一々嵌めて見たが一つとして旨くチヨキンと頭に調子の取れる帽子はない。いくら、調べても無い。偶々「ホッこれならいゝぞ」と思はず悦に入つたのがあつたら、今度は密ツと値段を見ると、いゝ筈だ先刻のと同じい値だもの。

「この外に未だありませんか」

と、己れは流石に高値いから御免だとは八字髯や金時計の手前と云ひかねて、まだ外のと獅噛み付いて見た。

「ま、お氣の毒様ですが、目下の所は」

と、お出なすつた。それぢや又來るからと出て了へばいゝんだが、それ



が己れには出来ぬ、何故なら買はうと思つた刹那に買はないと張合が抜けて了つて、氣乗りが失せるからだ。

「さア困つたナ」

と、その癖自分の財布の中に困りながら、品物に適當な物がないから困ると云つた風に發音して、

「之れは實際云ふと少々小さいんだがな」

と云ひながら、又もや未練氣に先刻の帽子を被つて見、今度は暫く定價と睨みつこし、何う考へて見ても欲しくて堪らなくなつて來たので、到頭我を折つて、ホツ／＼と態と恬淡らしい笑ひをしながら、  
「金があればいなア、無かつたら明日まで延期だウハツハツハ」と、強ひて番頭の手前快活を裝うて「待てよ有れば萬歳だぞ」と無邪

氣相に財布を出して中を調べて見た。實はハラハラ調べて見た。

「有る、有る、有つた!!」

いや待てよ、一枚二枚……待てよ一枚二枚、己れの顔は伸びたり縮んだりした。

成程あるは有つたが、ちよんびりあつたんだ、後へは一文も残らない、否僅かに△銭しか残らない、實に危ない藝當だ。己れは確かに定價通りの金が見事財布の中に收まつてゐると云ふ確信が附くと、急に又以前の沈着な威嚴ある紳士に立ち返つて、

「ハツハ、一寸心配かけて見ましたね」

と、鷹揚な口を利いて、

「それぢや代は此處に」



と投げ出した。

「有難う御座います、只今受取を」

と云ひながら、先方の方へと行つてゐる間に己れは熊見たいな手で思はず胸を撫で下ろし、「やれ、やれ」とフウフウした。

偕て其の帽子は直ぐ様其處でもう頭の上へ確つかと載せ、鏡に全面を寫して「好紳士まさに見受けた」と悦に入り、從來の帽子は直ぐ紙に包んで貰つて「誰だい今まで此塵汚ない帽子を被つてゐた奴は」と其の紙包を顎でシヤクつて遣つた。其の癖その紙包みを之は買物で御座いと許り空中にヒラ／＼させて、彼れ他見男さんは意氣揚々と洋行歸り見たいに總ての人間を卑下しつゝ、大道我が物顔にこの頭の上を見よと許り濶歩した。

偶々知つた者に出會するとどうかして帽子をよく見せ付ける爲めには俯向いて見せなくちや、よく相手に分るまいと思つて「ねえ君、僕の家はね、斯う行つて、斯う曲がつて」と、地べたへ地圖を書いて見せる。腰がその時勢ひ曲がる頭が垂れる、帽子が相手から見下ろされる。オヤオヤと思ふ、どこ製だと聴く、なアに倫敦でさア。と其の倫敦でさアと云ひたくて仕方がなかつたけど、誰も何んとも聴いて呉れ無い、齒痒ゆくなつて僕の方から「君、これね倫敦製だよ、素敵だろ」と此方から切り出して無理に感心させ、そら裏縁が皮だ、汗がにじまないよ!!

さて話は前へ戻つて倉舗君と二人は三越へ入つた、何時も食事時間の正午頃に來る故か、一杯の人だ。今日も一杯だ、世の中には本當に腹空が



澤山たくさんあるものだと思ふ。女給仕おんなまきが我等押すな押すなわれらの連中れんちゆうの中なかを「相濟あひすみません、少々御免下さい」と細い美しい声こゑを出して割わつて行く、よく彼塵あんなに早く歩いてお汁粉しるこを潘こぼさないものだ。と時々立止たふまつては感心かんしんして見詰みづめる。

「オイ座すわる所ところがないねえ」

と倉舗君くらしきくんに聲こゑをかけたつ、二人で空席くうせきを探さがす、勿論見當もちろんかあたらない。己れおれみたいな眼めの早い者はやいものでさへ見附みづけ出せないんだから、誰だれが血眼ちまなこになつたつて駄目だめだ。

それぢや例れいの通りと許ゆるり、一人一人の御膳おぜんを覗のぞき、此處こゝが明あき相あだと思おもはれる所ところを物色ぶつしやくすると、矢やつ張り僕等ぼくらみたいな連中れんちゆうが到いたる所ところにあるものと見みえて、其等それらの者ものは各自かくじの物色ぶつしやくした位置ちゐの後うしろに棒ぼうの様ように突き立たつて

「オイ早く喰くはんか」と許ゆるり身構みがまへしてゐる。客きやくに依よつては親切しんせつに直すぐ立たつて椅子いすをあけて呉くれる者ものもあるが、中なかには意地いぢの悪いわるのがゐる。悠々いゆういゆう煙草たばこを喫のんで「急いそがば廻まはれ勢多せたの長橋ながはし」と云いふ顔付かほづきをしてゐるものがある。中なかには又またいゝ年齢ととしをしてゐながら、十五六じふごの一心不亂しんふらんに立たち働はたらいてゐる女給おんなまきの品定めしなまをしてゐる呑氣者のんきものもある。

己れ等おれらは彼處あそこがいゝだろイヤ此方こちらの方が早く空あくだらうと云いつて、その裡うちに頭柱あたましらの下したになつてゐる一偶ひとつを發見はっけんした。そして其その客きやくの後うしろへ突つ張ばつて僕ぼくは「そらあすしが一つ減へつたそら又一また一つ頬張ほらばつた、もうあと二つ食くへば立たつて呉くれるんだ」と一生懸命しやうけんめい見詰みづめてゐる。倉舗君くらしきくんは又また「それお汁粉しるこをチウーと吸すうた。そらお椀わんを嘗なめた、もう濟すむだらう」と身構みがまへてゐる。女おんなの客きやくは斯かうなると氣極きまりが悪いわるものだから、グツと一吞ひとのみ



して胸をトン／＼叩き「オウ苦しかつた、か、勘定」

「女給、女給、此處が勘定だよ」

と、自分の勘定でもない癖に、赤の他人の爲めに倉舗君は親切を極め、その客が中腰になると、もう椅子をグイと引張つて「どうも濟みません」と勝手に奪ひとつて、己れが未だポカンと後に立つてゐるのに業を煮やし、態と隣へ聞えよがしに、

「直ぐ隣があくよ」

之を聽いては隣の客も黙つて居られず、宜しく博愛衆に及ぼす可しと許り、まだ喰べようとしてゐたあすしの半分を名残惜し氣に見詰めながら「さア何卒あかけ下さい」と、己れに椅子を譲つて呉れた。

「やアどうも濟みません」

と、云ひながら己れは其れを手許に引いて、

「三越は込み合ひますなアーヘツヘツ」

と巧妙なる御世辭を云ひながら、ヒラリと身を轉はして座り込み、グツとテーブルまで進み出で、

「ウへ、漸つと座れたね」

と、倉舗君を顧みると、

「ウへ、先づ之でよかつた」

と、互にウへ、ウへ、と喜びながら、

「全で満員の電車で無理に飛び乗つた様なものだ」

と、大に苦心の程を語りながら、



「何を喰はう？」

「さア何がいゝか、何でもいゝ」

「今日は鯛飯を喰つて見ようか」

「よかろ」

「オツと女給、女給」

と、折柄そこへ後片附けに來た鼻の高い眼のやゝキツとした白いと云ふよりも寧ろ蒼い方に近い狐に似た十七位の女を捉へて、

「女給、エー鯛飯二ツ、日本菓子二ツ、バイニツ、紅茶二ツ、之れ丈け持つて來てくれ給へ」

「鯛飯二ツに、日本菓子二ツに、バイニツですね」

「それに紅茶二ツ」

「紅茶二ツ、ハイ承知しました」

と、素早く片附け、いそぐ去つて行く。

「今のは一寸美人だね」

と倉舗君は小さく云ふ。

「醜つとも無いのがテーブル番だと、喰べ物まで拙くてね」と答へつゝ、己れは餘りムーツとした空氣に堪へやらで、被つてゐた帽子を脱つてテーブルの上へ乗せた。

「此の食堂では誰れが一番美しいだろ」

「己れは廿五番と思ふ」

「さうか僕は廿番と思ふ」

「廿番は孰れだ？」



「廿番？ エーと待てよ」

と、暫らく往來ふ女給を眺めてゐたが、

「それ、それあの肥えた、キリツとした鼻筋の……」

「どれ、どれ？」

「そら今此方に向いた、ソラ笑つた」

「ホーあれが？」

と、己れはニンがりすると、今度は倉舗君が、

「君の廿五番と云ふのは？」

「僕の云ふのはエーと待てよ……来た、来た、そら其處へ通る瘦せた脊の高い……分つたかい？」

「分つた、君は瘦せたものが好きかい？」

「ウン、君は肥えたのが好きかい？」

「ウン」

「あの瘦せた方の相済みませんが少々御免下さいと云ふ聲が素敵だよ、

聽いてゐたまへ、今屹度あすこを割つて行く時云ふに定つてゐる」

果して先方へ行つて、相済みませんが少々御免下さい。

「どうだい？」

「成程妙音だ」

と云つてる所へ、平時だと大抵優に廿分は待たされるのが、五分と経たない裡に此のテーブル附の女給は待つて来た實に敏捷だ。顔から既に先刻から氣に入つてゐたのに、此の動作の敏捷ときては猶更氣に入つちやつた。己れと倉舗君の二人は交々聲を揃へて、



「君、君は感心だ、豪い、早い」  
 と、賞め稱やした。その女給は嬉し相にオホツとして、稍氣極り悪さに、其處等に散ばつてゐたお汁粉の椀を片付け始めた。フと其の時見覺らしい顔が己れの眼に寫つたので、ハテ誰だつたらうと其方を向いてる時、倉舗君が、

「サア此の帽子は被つてゐたまへ」

と云つて、ポーンと己れの頭に載せた、己れは載せられる儘になつて矢つ張り横を向いてゐた。聽て己れは自分が今見詰めてゐた顔が見違ひの人であつたと氣附くと共に、顔を舊に復して、箸を取上げた。何時か其の女給は見えなかつた。

程經て鱈腹喰つた二人は立上がつた、そして、人込みを割つて漸つとの

こと食堂を出るが早いか、その儘直ぐ昇降器に乗つて下へくだり、音樂に耳を樂しませながら、出口へ來て靴のカバーを脱がして貰ひ、電車道まで一緒に歩いて外に用があつたので、其處で倉舗君に失敬した。いつもだと日本橋の白木屋前まで浮世面白可笑しげに語り歩く習慣になつてゐるんだが。

□

別れに己れはヒラリと電車に飛び乗つて、銀座の△△社へM君を訪ねた。居るかと思つくと居ると云ふから、それぢやと云つてレンコートを脱ぎ、次に帽子を脱つて、釘に掛けようとして思はず「オヤツ」と叫んだ。見よ、新調の然かも最新調の大事なく己れの帽子の上に點々として黒い斑點が無數に連なつてゐるでは無いか。





己れはサツト顔色を變へるが早いか、慌て、手に執つて見た。  
 何だらう？ ハテ何だらう。斯う思ふと己れは小指の爪でコツコツこち  
 る様にして見た。却々落ち相にも無い。頭は次第にカーツとなつて來  
 た。己れは慌て、其處にゐた給仕を呼んで手拭に水を浸して來る様に云  
 つた、見知らぬ其の給仕はその社で重要なM君の友達と云ふので、大急  
 ぎで浸して持つて來た、己はそれで懸命に擦つた。けれども少つとも落  
 ち相でもない。ハテ何うしたらいいだらうと思案に呉れてると、給仕が、  
 「揮發油なら落ちませう」  
 と、云つて呉れた。さうだかね〜妻は半襟の垢を落すには揮發油で拭  
 くと一遍ですよと何かの序でに己れに話したことがある。して見れば屹  
 度あの筆法に違ひない。己れは卅二の此の年齢で漸つと揮發油で垢が落



ちると云ふことを知つてゐるのに、此の給仕は十三四歳で此の道を知つてゐる。然かも巧みに今茲で此の帽子に應用する智恵を案じ出した、己れより伶俐だ。

「やア君伶俐だねえ、よく其處ことを知つてゐるねえ、それぢや濟まないが一寸一走り行つて揮發油を買つて來て呉れないか」  
給仕は賞められた手前、況んや伶俐だと僅つた今拍手喝采された手前、厭とも云へず、

「ハイ」と應じて呉れたので、それぢやと小さい紙幣を持たせて「大急だよ！」

己れは漸つと其の時顔色らしい顔色が出た、一時は何うすればいいかと途方に暮れたが、揮發油とは氣が附かなかつた、揮發油なら屹度落ちる

ものだと妻傳てながら聽いてゐるから、最早大丈夫だ、もう何も其處に心配すること無いと思ひ込んでゐる所へ、給仕が歸つて來た。

「や、どうも有難う、御苦勞、御苦勞」

と、云ひながら、己れは罎を逆さまにして手拭の一端に揮發油を浸み込ませながら、それで素早く帽子の黒い斑點を擦つて、幾度も擦つた。モよかると取上げて見ると矢つ張り以前の通りだ、少つとも變らない。

己れの顔色は再び險惡に傾むいた。

屹度これは力の入れ方が足らないのだらうと思つて遂に一一罎から手拭に浸ます間さへもどかしと許り、サツと帽子の上へかけて、今度は全力を出して、ウン／＼擦つた。これでこそ美はしき御尊顔を拜することが出来るだらうと又取上げて見ると、矢つ張り依然として故郷の山河舊態



を持すと云つた風。

己れは泣き出したくなつた。買つて半年も一年も経つたと云ふものなら我慢もするが、漸つと一昨日買った許り。而かも臍の尾切つて以來被つたこともない高價な帽子、その帽子に天から降つたか地から湧いたか此の斑点とは全く之れ聞えませぬ。天道様さこえませぬわいなう。

どうかして斑点を早く取除いて一刻も早く、素通りの帽子にして見たいと云ふ一心で、到頭己れは給仕に小刀を貸して呉れと頼んだ。そこへ餘り遅いと云ふのでM君が出て来て、

「何をしてゐるんだ、先刻から随分待つてゐるんだよ」と云ふ。

「そんな所でないのだ。實は斯々だ」と己れは一番最初に倫敦製を振翳して、一昨日買った許しの帽子だからと悲鳴をあげ、それで此の通り汗

みどろの修繕で御座いと鼻を結んだ。

そこへ給仕が小刀を持つて來た。それを受取るが早いか、己れはコッコッけづり出した。

「オイ其麼亂暴するなよ」

と、M君全で自分の帽子のこの様にハラ／＼聲を出して心配する。

「だつて仕方がないぢや無いか、斯うでもしないぢや」と云ひながら猶も己れはコッコッけづつた。

所が餘りけづり方が烈しかつた故か、帽子の毛と云ふ毛が皆脱れて、中から少し白地が見え出して來た。

「やッー」

と、己れは思はず失望と意外の叫びを上げて驚き慌てた。



「それ見たまへ、だから先刻から僕が止めて居たではないか」  
 と、M君は他人の忠告は有難く頂戴してさへゐたら間違ひないものだよ  
 と云はぬ許りに、嘴を尖がらした。今更それに返す言葉が無かつた。  
 己れはM君との用談もそこくにして帽子のこと許り考へながら悄悄と  
 家へ戻つた。

その途中、幾度か帽子を脱いで見ながら之りや一體何んだらうと思案に  
 思案を重ねたが何うしても思ひ出せなかつた、何處で誰れが何うしたの  
 か、昨日は確かに此の斑點は無かつた。今日だ、今日だとすれば、朝起  
 き上がつて斯うして電車に乗つた迄の徑路を一々思ひ出しては考へた  
 が、矢つ張り杳として見當が附かなかつた。全く不可解である。  
 洵に相濟まないと思ふたのは此の電車に乗つて突然己れが帽子を脱いだ

時、前に座つてゐた人が、オヤ御辭儀して呉れたと早合點して慌て、帽  
 子を脱いで答禮したのだ。己れはなアに貴方の顔どころの騒ぎぢやな  
 い此の帽子の心配だと許り帽子ばかりをいぢつてゐたので、其の人流石  
 にこりや失策つたと許り、氣極り悪げに、今度はテレ隠しに帽子をいぢ  
 り、僕かア御辭儀したのぢや無いぞと許り定め込んだのは可笑しいやら  
 氣の毒やら。  
 家へ歸つて、

「お母アさん、之れ御覽、何んでせう？」  
 と云ひながら、その帽子を見せて、

「私には何うしても見當が附かないんです。或はヒヨツとすると汁粉の  
 汁ぢやないかと思ふんですが、汁粉の汁なら取れ相なものです。」



と云ふと、流石は年齢の功は違つたものだ。ヤレ新知識があるの何んのと我々威張つてゐたつて年寄りには協はぬことは成程あるものだ哩。母は斯う云つた。

「左様かも知れないよ、鹽氣のあるもので却々落ちないものだから」  
左様云へば幾程も汁粉は甘くても、考へて見りや大分鹽が入つてゐる。鹽が入つて居ればこそ彼麼いゝ味が出るんだ。

「揮發で拭いて見たんですよ、それでも取れないんです」

「ぢや矢つ張り其のお汁粉かも知れないよ、いくら揮發油でも鹽氣の物にや協はないから」

「だけども汁粉にしては少々色が黒過ぎます、それにコチ／＼附着いてゐるんです」

「一寸嘗めて見たら分るぢやありませんか」

如何にも左様だ哩。先刻から頭の痛くなる程考へに考へ込んだが、何んとも見當が附かなかつたが、云はれて見りや嘗めて見たら一遍で見當が附く筈だ、年寄りて矢張り此麼時には有難いものだとツク／＼感に入つて、仰せの如くその斑點に舌を當てゝ見た。

「オヤ甘い!!」

と、己れは頓狂に叫んだ。

「それなら、矢つ張りお汁粉だよ」

汁粉だ、汁粉だ、おのれ汁粉。

汁粉とすれば三越より外はない。三越とすれば何うして此の帽子にかゝつたんだろ。己れが知つてる範圍内、この帽子には何等の異狀が無かつ



た筈だ、イヤ確かに無かつた。

待てよあの時、己れは蒸あつかつたので帽子を脱いでテーブルの上に置いた、それからと、さう、さう、見知りらしい顔が来たので己れは横を向いた。さうさう、その時倉舗君がオイ此の帽子を被つてゐたまへよと己れの頭へボンと載せて呉れた、その儘二人は出た、電車に乗つた、M君を訪ねたその時始めて気が附いたんだ。して見れば倉舗君は己れが帽子をテーブルの上に乗せて置いた時、女給が己れの側見してゐる間に、其の帽子の上へお汁粉を漉したので、こりや大變此の儘斯うして置いたら又々お汁粉の汁を漉さぬとも限らぬ早く頭へ乗せて置いて遣らなくちやと云ふ親切から屹度載せて呉れたものに違ひない。それとも他の客が過まつて汁粉の餅をボンと、汁の中へ落したので、その弾みを食らつて

汁を四邊に飛散したのを倉舗君が見て、慌てゝ載せて呉れたものとも推せられる、孰方みち罪は倉舗君ではあるまいが、倉舗君は這般の事情は必ずや知つてゐるに違ひないと思はれる。然し若し知つてゐたものとすれば他客の前でムツリとした顔を己れがするのが好ましく無いと思つたら、外へ出た時直ぐ注意をして呉れねばならぬ筈だに。否倉舗君としては屹度左様云つて呉れるには違ひないんだ。その點が明白せぬ。知つてか知らずでか先づそれを倉舗君に聴かなくちや。兎に角其の晩己れは恨みを呑んで、痛ましい顔して黙々として寢床へ入つた。

□

翌日早速倉舗君を訪ねて、



「君は何處積りで昨日己れの頭の上に帽子を載せて呉れたんだい」と訊いた。倉舗君は變てこな顔して、

「君は妙なことを訊ねるね、別に之れと云ふこともない、テーブルが狭まかつたから載せたんだ」と、その口振りを察するに全で知らぬらしい。彼は續いて

「何うして其處事を訊くんだ？」

と云ふから、己れは詳しく説明して、

「兎に角帽子を見せて遣らう」と云つて立上がつて、帽子掛けの場所へ行き其の帽子を脱さうとする時フと一緒に脱いで置いたレンコートの頸の下あたりに矢つ張り帽子の上にしみてゐた斑点と同じい黒い斑点を一つ発見した。げに思はぬ発見である。

「オヤー」と己れは又驚いて、チーツと見据ゑてゐたが、ウン之で何もかも分つた哩と獨りで領いて了つた。

「倉舗君、分つた、分つた、之で分つた」と、己れは疑問が解けたと云ふ高らかな叫びを上げながら倉舗君のテーブルに近付いて己れの判断を云つた、倉舗君も「如何にも左様だ」と、一二もなく己れの説に雷同して了つた。

三越で昨日食事の時に同じテーブルに汁粉の椀の残骸が澤山あつた。それを女給は片付けて持ち去らうとした。ところが持ち去るにも持ち去る隙間が無かつた、何故なら椅子と云ふ椅子にギツシリ肩と肩とが擦れ合ふ程に客が詰まつてゐたから。

だから女給は仕方なしに其の汁粉の膳を人と人との肩の間から手を伸し



て、グツと差上げて自分の脊よりも高く翳して客の頭の上から手元へ引かうと試みた。その時何分兩手が高く上がつてゐる理論上、何うしても幾分膳の重みで、膳の不衡が取れず、斜めに成り勝ちになつた。その事はあの食堂へ入つて見たものは一遍で分る。その時牛憎膳の上に濡れてゐた汁粉の汁が膳が斜めになつたものだから、ポタ／＼と下へ濡れた、濡れた所が恰度帽子の上である、更、又レンコートの上である、で無くちや帽子にもレンコートにも此、斑點がある筈がない、而かも帽子に落ちた斑點とコートの上に落ちた斑點とが同一方向を示してゐるのが何よりの證據だ。

その落ちたのを女給は何分翳している膳を顛覆させまいと云ふ一心不亂から少しも氣が附かなかつたものと見える。或は氣が附いたけど、客に

此塵事を云つたなら何變苦情を申出られるかも知れぬ、そしたら自分は監督から小ヒドイ小言を喰ふに定まつてゐる。他の女給の連中から嘲笑ひを受けるに定まつてゐる。それよりも客が幸ひ氣附かぬは勿怪の幸だ、黙つてゐるに如くは無しとあばよを定め込んだものとも思はれる。執方みち三越の食堂で受けた斑點であることは最早明瞭である。

「屹度左様に違ひない、飛んだ高價い食事代になつたね」と、倉舗君は半分面白相に云つた、己れは何故昨日は白木屋の食堂にしなかつたんだらう、白木屋の食堂へ入つてゐたら或は此の災難は免かれなかも知れぬとも思つて見た。二人は毎日白木屋か三越か執方かの食堂で晝飯を食ふことになつてゐるんだ。生憎昨日は三越を選んで此の失敗だ、全く斯うなると運の力と云ふより外はない。





翌日二人は又三越の食堂へ行つた、見覚えのある其の女給とビタリと眼が合つた。先方の其の刹那の顔付は恰も昨日爲したことを知つてゐるかの様な顔でもあり、又全つきり知らぬ様な顔でもあつた。

然し若しや知つてゐたとしても己れには其れを叱咤するだけの勇氣がない。何故なら其女が醜ともない顔であつたなら怒髪天を突いたかも知れないが、數多き中での優秀な部に屬するおん顔の所有者ときてゐるか、叱るにも肝心の叱る聲が出ないぢやないか。斯うなると美人に生れると知らぬ所に餘徳があるものだトツクと思ふ。

猶その上叱られる原因は一昨日彼女は實に敏捷な程早く註文の品を持つて來て呉れたから其の時己れも倉舗君も口を揃へて「君、君は感心だ、豪い、早い」と賞め上げた手前、今更以つて「君は怪しからん、馬鹿だ」



とも云へないぢやないか。

己れは先づ泣寝入より外はない。

此の頃でも隔日の様に己れは三越へ行く、三越へ行けば其の女給を見る、その女給を見れば己れは帽子のことを思ひ出して頭から脱いで見る、矢つ張り斑點は少つとも取れてゐない、恐らく此の帽子を被つてゐる間己れは彼女を忘れぬであらう。否三越の食堂のある限り己れは此の帽子のことを忘れ得ぬであらう。

## 珈琲を飲みつゝ

フト森尾君に逢ひたくなつた。

今から三年前己れが伊香保へ旅をした時に偶然同じ汽車で乗り合はし、隣席の儘に二ツ三ツ話合つたのが動機となつて、宿屋から散歩から歸京まで始終行動を共にした紳士がある。それは森尾君である。森尾君には其の後二度三度夜の銀座で出合つたりカフェーで偶然落合つたりしたが、其の後サツパリ云ひ合はした様に逢はなくなつた。

所が今日己れは或る焦慮の爲め頭腦の中がグワア／＼して兎てもヂツとして居られなかつたから、あてどもなく銀座の町を歩き、此慶時あの森尾君と心ゆく許り物語つたら、ガラリと晴れるだらうと急に森尾君が戀



しくなつた。

それにしても住所は澁谷と聞いただけで、番地が無論判然してゐなかつたから呼び出す手筈もない名刺を貰つたは貰つたが、三年前の話ときてゐるんだからある可き筈もない、だと云ふて逢ひたいと思ひ出したが最後、何うしても逢はなくちやならぬ己れの性分が従順に諦めを見せて呉れぬ。

偶とあのおかみさんなら或は知つてるかも知れぬと思ふた。あのおかみさんとは銀座の某店の女主である。森尾君は屢々そこへ買物に行くことをよく知つてゐるんだ己れもよく行つたんだが、近頃サツパリ御無沙汰をしてゐるんだ。さうだ彼處へ行かう。

さう思ふて己れは漸つと足の方角が確定したので、ズン／＼歩いた。

幸ひおかみさんが帳場に座つてゐた。

「やアおかみさん！」

斯う聲をかけて笑を浮かべながら入つて行くとおかみさんは飲みかけの煙管持つ手をビタリと止めて己れの顔を見たかと思ふと、頓狂な聲をあげて、

「まア！」

と、半分呆氣に取られて、

「まア！」

と、又まアを發しながら、

「一體何うしたんです、大に怪しからんぢやありませんか」

「イヤ濟みません、忙しいもんですから」





「どこかへ旅行してゐたんですか」

「いや」

「ぢや東京にゐたんですね」

「ま、さうです」

「ま、左様でもないもんです、此の大事なおかみさんを訪ねないと云ふことがあるもんですか、今の若いものは兎角年寄の女に同情がありませんね——」

と、二の句も吐かせない、己れは頭の毛ばかり掻つて應對した。

「時におかみさん、森尾君来ますか」

「森尾さん、あの人も少々變物よ來る時には毎日の様に來て、來ない時には二月も三月も來ないんですもの、でも貴方よりか譯がいゝわ」



と、厭味を並べながら、

「昨晚お出ででしたよ」

「昨晚!？」

「それも二月目に來たんです」

「それぢや近頃やつぱり來ないんですね」

「えい、あの人も不都合者ですよ」

と、二人共此處のおかみさんには滅茶々々だ。

「住所を知つてゐるんですか」

「さア存じませぬえ——」

と、たよりの無い返事。己れはガツカリして、

「どうしてゞも分りませんか、分る方法がありませんか」

「さアね」

と云つて、ヂツと己れの顔を見据ゑながら、

「何か御用なんですか」

「イヤ用つて別にないんですけど、急に逢ひたくなつたものだから」

「さう?」

と云つたかと思ふと、ニタリと笑つて、

「何かいゝことでもあるんですか」

「いゝや別に……」

「怪しいねえ。二人とも兎に角男振りがいゝから、あゝ險呑、險呑」

と、態と仰山相にして見せる。

「ぢや今度來たら是非私が逢ひたいと云つてましたと仰言つて下さいませ」



せんか」

「えい、お易い御用ですとも、確かに」

「ぢや宜しく、左様なら」

「オヤ早や歸るんですか。自分の云ふことだけサツサと云つて退却とは少々蟲が善過ぎるわ」

「兎に角左様なら」

「ぢや又どうぞ」

斯うして再び明るい巷へ身を委した己れは又も目的もなくポケットへ手を突き込んだ儘歩き、散歩も詰らないから仕方がない、今日は此の儘家へ歸らうかと尾張町の交叉點近くへ來ると、交番の後の光りの薄い所に、二人の紳士が何やら云つて今しも別を告げようとしてゐる。何氣な

く其の一人の顔を見ると、確かに森尾君だ、餘りの不思議さに自分で驚いて了つて、思はず近寄つて、やアと聲をかけた。

「オイ森尾君！」

すると森尾君は眼鏡越しに誰れだらう己れに聲をかけたのはと許りザツと見据ゑたかと思ふと、其の顔は忽ち笑顔と喜びに變はり、

「イヨ——」

と云ふが早いか、傍らの友人を「君、失敬」とぶツ放しにして了つて、己れの方へ進み寄りながらツと手を握つて、

「何うしたんだい？」

「イヤ君こそ何うしたんだい」

「久し振りだねえ——」



「實に久振りだねえ——」

と、互に久振りの顔をツク／＼見合せながら、

「相變らず色男だねえ——」

「君こそだ、有望だねえ——」

と、孰方も喜ばせを交換しながら、

「ま、何處かへコーヒでも飲みに行かう」

と、己れに云ひながら、今度は己れの脊中をボンと叩きながら、

「君、益々成金になつたてんぢやないか、大に奢つて貰はなくちや」

「いゝや君こそだ、君は二千萬圓の會社の重役ぢやないか、自動車を買ったかい？」

「こりや恐入つた！」

と森尾君も面一本頂戴しながら、

「全く偶然だねえ——」

「イヤ偶然ぢやないんだ。實は」

と、己れは今おかみさんの所へ行つて斯々云つて來た許りだと云ふと、

森尾君ホツと鼻の頭をビクビクさせながら、

「ホウー、そんなに己れの顔を見たかつたのかい？」

「左様よ、嬉しいか」

「ウワア左様か、矢つ張り持つ可きものは他見男さんだねえ——、君は顔に似ぬ人情が濃かだよ」

「それぢや何處へ行つても持てる筈だ」

「オィイ水を呉れーッ。」



二人は喫茶店へ行つた。

流石に己れの見込んだ男だけあつて話し合つてると興味限りない。

「時に君に僕が今まで堅く隠してゐた或る秘密を話さうか」

「秘密と云ふと？」

「己れ見たいなチャランポランの男でも首つ丈けになつた或る女の事  
や」

「ホウ、そりや君の戀物語か」

「さうよ、秘中の秘、面白いんだよ、君に一遍話をしよう／＼と思ふて  
ゐて、到頭逢はず仕舞ひさ。然し之れ丈けは是非堅く頼んで置く、僕の  
姓名と女の姓名は名譽の爲めに許して呉れたまへ」

「そりやい」

「ぢや話をするがね。……あゝ斯う云ひ出すと彼の女が髣髴として眼前  
にチラついて来る。感慨無量だねえ——」

と、その眼の中は異様な人戀しさに燃えたかと思ふと暫し黙考。

「よし、構はぬ話さう」

と、身を進めた。その時己れは慌てて、

「まア一寸待ちたまへ、此處で大分時間がとられて氣の毒になつたか  
ら、他へ行かう」

と、遮ぎつて、突然女給を呼んで勘定を濟ませ、その儘外へ出て、ハテ  
とコクリとしながら、

「さうだカフェーライオンへ行かう」と足を向けた。

「先づ此の邊から話をボツリ／＼出して行かう、今から三年前」



と、彼はポツ／＼話を切り出した己れは幾度か首肯ながらウム／＼と聴いた、カフエーライオンを潜つて坐るまで、坐つてからも彼は殆んど夢中に喋り續けた、己れも夢中に聴き惚れた、その話が次である。今から八年前森尾君は或る小會社の社長をしてゐた。所が聽て何うしても女事務員の必要を感じたので、七八名募集して見ようと云ふことになつて、都下の重なる新聞に此の旨廣告をした、すると其の反應は忽ち現はれ、翌日既に卅幾名と云ふ多數が我れも／＼と押し寄せて來た。その試験官には勿論社長たる森尾君が成つた、森尾君は一人一人を試験する前に一應何處連中が集まつたゞらうかと其集合場へ來てズラーリと一通り無心に見渡した。

すると左の隅の方に年齢の頃十五六の得も云はれぬ美しい少女が恥かし

相に控へてゐるのが眼に附いた。森尾君は餘りの美貌にビタリと視線を止めて思はずヂツと凝視した。すると少女の視線もバタリと其れに行き合つたかと思ふと其の少女はサモ恥かしげに心持ち顔を紅に染めながらニツと軽く笑むだかと思ふと慌て、眼を落して了つた。

森尾君は此の堪へなき風情にもう冷靜を失なつて了つた。何んと云ふ可愛い、美しい娘だらう、眼を見よ、鼻を見よ、色を見よ、髪を見よ、又その姿を見よ！と心で叫んだ。

彼は何故か自分まで少しく顔を赤らめながら惶惶として其の場を外して了つた、何人も其の時何故森尾君が急に赤い顔をしたかと云ふ事に就いて誰も氣附く者が無かつた。

聽て試験する時が來た。



到着順に依つて一人々々は彼の前へ呼ばれた、彼は扉を排して入つて来る顔毎に今度こそ其の少女？と思ふて眼を皿の様に見張つた、けれども来る者も来る者も違つてゐた。彼は其等の者を碌々試験する氣になれなかつた。甚しきは御辭儀した途端「あゝもう宜しい」と迄慘虐に取りあつた。彼女等は何を試験されたのかボカンとして下つて狐につまさされた様な顔をしてゐた。

「チエツ、まだあの娘の番が来ないのか」と森尾君は待ちあぐんだのか少々焦々した氣分になつて舌鼓を打つてる時、十六番目に淑やかに扉を開いて入つて来た主こそあゝ先刻から待ちに待つてゐた其の少女であつた。森尾君は其の姿を一眼見るが早いか苦り切つてゐた顔を俄かにゑびすの様にニコニコさせて、聲まで猫撫聲を出し、「さア〜」と自ら立つ

て椅子に導き、

「今日は御苦勞さまでした」

と、顔にも似せぬお世辭まで振舞き、

「どうぞおかけ下さい」

と、今まで出した事のなき叮嚀音を發して坐らせた。

「お宅は遠いんですか」

「いゝえ澁谷から」

と、玉を轉ばすが如き裡には明朗として徹した。あゝ聲も又よしと森尾君はニンガリして、

「ホッ、澁谷ですか、私も澁谷です」

と、彼は愈々我が意を得たりと許り一膝乗り出して、



「澁谷は何の邊です」

女は答へた。

「あア然うですか」

森尾君はニタリとして、今度は一應試験官としての義務上、

「御両親は？」

「ハイ、二人とも居りますで御座います」

「お父さんは執方へ？」

すると、此の時少女は急に物悲しげな表情をして、

「父は漢學の教師をしてゐるんですけど、此の間から不治の病氣に罹つて、それを止めなくちやならぬことになりましたので」と、聲は次第に、淋しく悲しく落ちて來た。

「それはお氣の毒の至りです」

と、森尾君はニヤ／＼してゐた顔を急に引き緊めて眉をひそめて見せた。そして心から同情しますぞと云はぬ許りに鼻をクン／＼させて眼を二三度閉ぢたりあけたりした。

「お察しします、お察しします」

と、娘の氣を引く爲めに二言續けた、その癖心の中では此の少女を眼の前に侍らして、斯うして二人限りで語り合ふのが嬉しくて／＼堪ちなかつた。

「學校は？」

と、森尾君は早く娘の氣を一轉させた方がと斯う切り出した。

「ハイ學校は、ハイ學校は」



と、今度は眼の中へ玉の露を宿らした。森尾君は之りや失策つた質問を出したものだ。後悔を噛むだが、今更後退りもならず、只眉を愈々ひそめて凝視した。娘は遣る瀬なき悲痛の裡にも明白答へた。

「私は學校は大變好きなんですけれど、其麼譯で父が病氣ですから學校は止して了つてと思ひまして、斯うして募集に應じて參つた次第で御座います」

「あゝお聞きすればする程鼻のつまる様なお話です」

と、森尾君は彌が上に同情して云つた。その癖鼻は少つともつまらなかつた。

「學校はシテ孰方ですか？」

「△△女學校です」

「何年生ですか？」

「二年級にゐます」

「さうですか」

森尾君は出来るなら此麼會社に雇はずに早速其の學費を出して遣つて通學を薦めて見ようかと思ふた。然し左様したら第一その兩親が「ハテ變な社長だぞ」と却つて用心して逃げを張るかも知れないと思ふた。それよりも自分の手元に置いて次第に此の娘を手なづけた上何うにかしたいものだ。と好く無いことを思ふた、一眼見た時彼は既に此の娘に戀したのである。そして「好い女だな」と思ふた刹那彼女は最早試験に合格して了つた。他の女こそいゝ面の皮である。斯くて會社は豫定の如く六名の女を採用した。その裡で第一番に合格したのは勿論、勿論云ふ迄もなく



此の娘であつた。

森尾君は社長の權威を以つてして、此の娘を自分の部室附きにして置いた。若い社員連中は均しく指を啣へて「社長に成ると云ふことは好いものだなア——」と眼をシバ叩いて見守つてゐた。

森尾君は其から、決して缺勤しなかつた。そして毎日十一時頃に出勤するのだが、彼女が來てから彼女と同じく八時に出勤した。それ程彼は彼女を戀した。楽しい囁きは彼自身から發して彼自身を喜ばせてゐた。

何日しか社長は此の何も知らぬ處女に握手を覺えさして了つた。

實際彼女の艶麗さは形容する言葉も無かつた。殊に其の笑顔のよさは一笑以つて千金に優り何人と雖も如何なる石部さんと雖も惱殺させずには置かなかつた、だから第一各社員が騒ぎ出した。次に訪問客が之に雷同し

た。彼等は平生敬遠主義を取つて滅多に入つて來なかつた社長室へ彼女が來てからは、何かとホンの型ばかりの用事を見附けては繁々と出入した。社長内心大に面白くない、殊に中には眉目秀麗な青年社員がゐたから愈々以つて大に面白くない、殊に此の娘は誰れにでも愛嬌よく應對するので、その度毎に扱は此男に參つたんぢやないかと益々怏々として樂しくない。早晚何うかしなくちや何だか掌中の玉を奪はれる様な氣がしてならなかつた。

斯くて其の年は暮れた。

次の年の春三月、日頃から悠つくり機會を見付けたら云はう／＼と思ふてゐた所、偶然電車で一緒になつたから、下りてから途すがら到頭斯う云つた。それは學校を途中で止したことは如何に考へても惜しい極みだ



から、その學費は全部僕が出すから一應親に此の事を話して見たら何うかと云つた、決して森尾君は變にも他人に若しや貴女を取られたら一大事だからとは洩らさず、飽く迄神妙な口附きして云つた。すると娘は「そんな事をして貰つては」と固辭しつゝも内心好きな學校へ通ふことが出来るかと思ふと嬉しくて嬉しくて其の思ひは期せずして雙頬を血色に漲ぎらした。そして家へ歸つて此の事を兩親に洩らした。兩親は勿論其慶事をして頂けるなら其れ程結構なことは無い、まあなんて有難い社長さんだらう、あゝ其の社長さんこそ神ぢや佛ぢやと老の眼に涙を溢れて喜んだ。まさか明けて未だ肩上げも取れぬ十六やそこの娘に、嚴めしい社長殿がぞつこん打ち込んで御座るとは變にも否夢にだに思はなかつた。そして是非社長さんにお目に掛つてお禮を申上げたいと云つて

ゐた、娘は其れを森尾君に傳へた。森尾君はヤレ〜い、鹽梅と戀の一歩が更に進んだ様に思ふて獨りで微笑であた。その頃娘の唇は又森尾君に教へられた。

其の話以來、二人は毎日朝出る時は停留場に待合はし、夕方は又互に手を取らむ許りにして社の往復を共にした。其の頃二人の噂は益々擴まつて打ち消す力も出なかつた。

斯くて其の四月愈々豫定通り娘を社から退かした、と同時に蝦茶袴のあでやかな姿が再び△△女學校を引き立たせた。森尾君から毎月餘分の學費が必ず期定の日までに彼女の家を嬉しく訪づれた。

森尾君は斯くして時を待つた。

その夏、森尾君は其の娘に「日光へ遊びに行かう」と誘ひの手紙を出し



た。勿論二人の仲に就いて何等の疑念も挿まぬ両親は全で孫でも預ける様な氣持ちで一二もなく承知した。

その旅こそ森尾君には生涯忘るゝことの出来ない楽しい旅であつた。娘には又その印象が一生忘るゝことの出来ないものがあつた。二人が日光へ着いたのが晝の二時頃であつた、それから見物に時を費やした。森尾君は何故か時間を悠つくり伸ばさうくと云ふ下心があつたものだから念入りに見なくてもいゝ所をさも感心したらしく念入りに見詰め、剩へ徳川家康公はと飛んでもない所で家康公を引張り出しては故意に長びかせた。

宿へ歸つた頃はもう既に薄暗かつた。夕飯を済まして了つて、そろそろ疲れが出たのでうつとりしてゐる時、娘は、

「ねえ、もう歸京ませうよ」

と、云ひ出した。すると森尾君は態と呆けた様な顔をして、慌てゝ時計を出して見ながら、

「チエツ、もう汽車の時間が遅れて了つた。六時何分發より外に汽車がないんだ、チエツ残念」

と、云つて顔をしかめて見せた。すると娘はサツと顔を變へ、

「ぢや何うするの？」

「何うするつて泊るより外はない？」

「泊る？」

と、見る見る泣き出して、

「あたし他所で泊つたことが無いから、それに父にも母にも今日歸るん



ですからと申して来ましたから  
と、身を揺ぶつて崩れた。それを肩から撫でながら森尾君は、  
「だつてもう汽車に間に會はないんだから、間に會はぬどころかも出  
て了つてるから」

と、時計を示しながら、

「仕方がない泊るより方法がないんだから」

「でも、何うしても私は歸ります私は此慶事にならうとは少つとも少つ  
とも。」

「無理に歸るつて汽車のないのに何うして歸るの？」

「……………」

娘は唯泣くばかりであつた。





斯くて離れの静かな部屋にも夜が更けて來た。  
起きた娘は最早處女では無かつた。

森尾君にも娘にも扱ても思出多き哉日光よ。

日光から歸つてから森尾君は益々娘が可愛ゆくて堪らなかつた。三越に  
白木屋に彼女に似合と思ふものは金に構はず買つて與へては只管歡心を  
求めてゐた。

次の年の夏二人は稻毛に遊んで第二の日光をほしいまゝにした。口には  
云はねど其の頃最早兩親は二人の素振りに氣が附いたらしかつた、二階  
の彼女の部屋に二人を置いた限り兩親は何時まで經つても上がつて來な  
いことが、それを何より證據立てた、森尾君の仕送りは遂に其の家の家  
計全部に何日からと無しに及んで了つた。



「ところが君」

と、森尾君はグーッと珈琲を飲み下ろして、熱心に聽いてゐる己れの顔  
を見ながら、

「僕は其の女に二年以上ピタリと逢はないんだよ」

「ホーウ何うして？ もう飽いたのか」

「飽くどころか此の年齢をしてゐて恥かしながら毎日其の女のことを思  
はぬことが無いよ」

「ぢや縁でも切つたのか」

「いゝや相も變らず毎月此の頃でも仕送りは續けてるんだ」

「ぢや一體何うしたと云ふんだい？ イヤそれよりか其の娘と云ふのは



「今年幾歳になつたんだ？」

「二十三だ」

「いゝ所だナ」

「素敵な所だ」

「當り前の娘ならもう嫁入り頃だぞ」

「それで心配してゐるんだ」

「心配してゐると云ふと其の娘を何處かへ嫁入させようと目論んでゐるのかい？」

「まア聽いて呉れたまへ、話は矛盾するが實は女の一生を己れ故に何日迄も蔽つてゐるのが人道上忍びないんだ、殊にもう満開の年頃だ今の裡に何處かへ片附いて欲しいのさ。だが僕として今更何うしても其れを娘

に切り出すことが出来ない。

何故切り出すことが出来ないかと云ふと、娘の身の爲めを思へばこそと自分から逢はない様にして、先方で勝手に最早僕から振られたものとして嫁きたい所へ行つて呉れる様に願つてゐるんだ。ところが若し逢つたが最後艶然一笑の其の笑顔を一見見たが最後、又己れは燒木に火が附いたより以上に猛烈になつて了つて兎ても壓へることが出来ないんだ」

「本當にそれぢや君は何うでも勝手にして呉れてと暗に嫁に行けよがしにする意志があるのなら何故今でも仕送りを續けて先方を義理に嫻ませるんだ、一層ピタリと絶つて了つたら何うだ」

「そこに未だ己れの未練が残つてゐるのさ」

「然し君は女の爲めを思ふて交際を絶つてゐると云つたぢやないか、交



際を絶つてゐる位ならもう未練がない筈だが」

「ところが有るから不思議なのさ。」

「ぢや斯うだね、要するに本人に他に男を持たせ度くはない。さりとして又何日まで、自分の物にして置きたくも無いと云ふんだね。全で蛇の生殺し見たいぢや無いか」

「それが僕に好きなんだから仕方がない」

「詰らんことが好きぢや無いか。困つたね。僕だつたら未だ未練が残つてゐたら又もや熱中する丈け戀に熱中して、もう醒めかゝつて來たら、ぢや君失敬左様ならと淡泊別れて了ふがね、君には其れが出來ないんだね？」

「何うも出來ないらしいね」

「情けない男だね」

「仕方が無いよ」

「ぢや今度何うする積りだい。」

「何うするつて相變らず送る丈けは送るさ。」

「屹度先方では君に對して嫁には行けず、さりとして君が逢つては呉れずと云ふので、他に男が出來てゐるかも知れないよ」

「そりや分らぬ、だけど仕方がない」

「全く君は妙な性だよ」

と、己れは何う云つていゝか分らなくなつた。

「ねえ君、その女の笑顔つたら君に一眼見せたい位だ、何んと云はるか。こゝん所へ大きな醫をニツと拵へて」





と、指で頬べたを押して見せながら、

「ねえ貴郎ときた時のよさ!! あ、もう此麼話は止さう、思ひ出して来て仕方が無い」

「止して呉れ、己れまで變な氣になつて來た」

「ぢや止めて置かう、君に見せたいな」

「見せたら先方から參るぞ」

「こいつめ」

と、ボーンと脊中を叩いた。

「オツすつかり遅れつちやつた。さア歸らう」

と、彼は立上がつた。己れも立つた。女ボーイはヤレ／＼長尻の客が到頭立つて呉れたかと追つ拂ふ様な眼付で飛んで來た。



外へ出た二人は「ぢや又二三日裡に逢はう、屹度」「屹度だよ」と念を  
 入れく、人込みの中へ右と左に別れた。  
 森尾！ 彼奴兎に角面白い男だ。

## 羊羹の祟

己れの知つた令嬢に世にも比ひなき美人がある。一日己れを訪問して來  
 た、藤村の羊羹をどつさり出した、平生來馴れてゐる故か、彼女は勧め  
 る儘に片ツ端から平らげた。  
 そのことを己れは著書で悉皆有の儘書いて、その本を彼女の母に送つ  
 た。するとさア本人之を見て怒るまいことか、「羊羹二本喰べたことなん  
 か書く必要がない、以後斷然他見男さんとは絶交だ」と云ふ大變の權幕  
 ですよと其の母から己れに知らせて來た。恰度その頃學校が休暇だつた  
 ので彼女は故郷静岡に歸つてゐたのである、女子大學の三年生。  
 果してよくくむかッ腹が立つたのと見えて其の後打ち絶えて音信がな



かつた、ハ、アして見ると矢つ張りお母アさんから通知のあつた通り愈  
 愈本氣になつて怒つてゐるんだナと思つて、己れは少からず當惑して、  
 そして別に怒るべき程のことでもないんだから、一遍逢ひさへすれば直  
 ぐ打ち解けるんだからと思つたので或る日休暇も終つた頃を見計ひ、彼  
 女が寄宿してゐる本郷の親戚へ電話を掛けて、「芳枝さん居ますか」と訊  
 ねた。すると疾つくにお移轉になりましたと云ふ、どこへ轉つたかと訊  
 くと、麻布の姉さんのお嫁入先から學校へ通うてゐるとの返事だ、そ  
 れぢや其のお嫁入先は何處ですかと訊くと、麻布のエイと、ツイ忘れま  
 したと云ふ頼りない答へだ。

どうかして知りたいたいものですなアと己れは當惑氣な聲を出すと、そん  
 なにお知りになりたいんですかと云ふ。え、是非知りたいんですと答へ

ると、それぢやもう十五分許り經つて又電話を掛けて見て下さいません  
 か、實は先日ある用件で近所の八百屋の小僧を使ひに遣りましたから、  
 その小僧へ聽きに遣つて見ますからと云ふ。左様ですか、それぢや濟み  
 ませんが、どうぞ願ひますと云つて一旦電話を切つた。

十五分程經つて再び掛けた。

「ハア西川さんですか、分りましたよ」奥様の聲だ。それに依ると麻布  
 六本木で電車を下りて少しく戻つて、古道具屋の横町を下りた所がさう  
 だ相ですと云ふ。番地は？ と訊くとそりや判然分りませんが兎に角ッ  
 イ附近に洗濯屋があるから、その洗濯屋でお聽きになれば一遍で分ると  
 小僧が申しました相ですからと奥様叮嚀な口調で教へて呉れる。

「いやアどうも有難う御座いました」と云つて、



己れは今訊いた其の六本木と古道具屋と、洗濯屋とを手早くノートに書き止めて、何時かあの邊へ行つた際に立寄らうと斯う思つて、再び又禮を述べて電話を切つた。

所が、折角斯うやつて聴き正した上胸に收めておくと云ふのは何だか奥齒に物の挟まつた様なものだ。己れは一層住所が大略分つたし、別に大して今日は忙しいことも無いんだから、思ひ立つたが吉日今から行かうと急に思つた。

思ふが早いか此慶事には躊躇するのが嫌な性分とて其の儘フイと電車に乗つて了つた、六本木方面は殆んど行つたことも無いので、乗換場所も知らなかつた、車掌に詳しく問ひ正してゐると、側に坐つてゐた老人が私も六本木まで参るんですから一緒にと云つて呉れる。

己れは若し其の老人が品のある年寄だつたら一も二もなく「どうぞ」と云ふんだつたけど、見るからに穢ならしい大に行動を共に欲したくない容貌だつたので、其の親切に對して丈けは三拜九拜してお禮を云ひながら、一緒に行くことと云ふことに就いてはウンともスウとも云はず、切りに乗換場所は？と訊いた、老人は宇田川町で下りて青山行に乗ればいと箸でくゝめる様に教へて呉れる。ハア／＼と己れは神妙に耳の穴を掘くつた。宇田川町で電車が停まるや否や己れは飛び下りるが早いか老人を置いてけぼりにして我れ一人一目散に青山行に駆け出した、實に神妙でない仕打ちである。どうも近頃不漁のお蔭で喰べ物が悪くなつた故か己れの量見まで悪くなつた。



六本木町で下りた己れは四辻に立つて、暫らく金魚の様に口を開けてボカンとして四方を見渡した、「吾人何れの道を選ぶ可きか」と許り。ところが斯う云ふ場合には實に無くてはならぬ有難いものがある、交番である。

己はぐる／＼ぐる／＼首を廻してゐる時に一隅の四角な箱の前に之れ亦ボカンと立つてゐるお巡査さんあるを認めた。己れはお巡査さんに用のあるのは道を訊く時ばかりである。

ツカ／＼進んで行つた、そして帽子を脱いで叮嚀に先づ御辭儀をした。此方が叮嚀な態度をすればする程先方も情けにほだされて叮嚀に教へて呉れるだらうと云ふ下心があるからである。己れは平常其の手を出す、それが必ず成功する。

果して見る、今も成功だ、お巡査さんは鄭重に舉手の禮を己れに返したではないか。

「一寸お訊ねしたいんですが」

「ハア」

「どこか此の邊に道具屋がありませんか」

「道具屋？ 幾程でもありますよ」

「こりや一本參つた哩。」

「ご、御尤です」

と、己れは一寸ドギマギしながら、

「エーと、角家の道具屋です」

「角家の？ エーと」



と、お巡査はエーと云つて急に空を見上げた、己れも其れに釣られて見上げた、星ばかりだ。

お巡査さんは幾程空を見上げて考へ込んでも思ひ出せぬと見えて、再び己れの顔を見下ろしながら、

「ハテナ、こーツと」

どうも見當が大に莫然とするらしい、そこで己れは更に有利な情報を之に付け加へた。

「そこを曲がると直ぐ坂だ相です」

「アツさうかい、なんだーい」と急に思ひ附いたらしく、

「此處を真直にお出になりますと」

と、一方を指さす。

「ハア」

「左様ですなア——、略二町ばかりお出になりますと、左手に道具屋があります多分その家のことを云ふんでせう」

「さうですか、ぢや多分それでせう」

孰方もいゝ加減なことを云つてゐる。

「この道ですね」

と、己れは指さした方を、己れとして更に指さした、御念入りが過ぎる、少々どうかしてゐるぞ。

「左様です」

と、お巡査さんは一も二もなく頷いた。

「いやアどうも有難う御座いました」



と、己れは教へてくれた親切に對する當然の理由として、紳士の仕様として珍らしい許りの鄭重な敬禮を再び捧げた、巡查も「我れも亦禮を知る」と許り、之に報いた。  
斯くして己れはスタコラ歩いた。

□

成程行くこと二町許り、果して古道具屋がある、その側に眸を凝らすと之れ亦成程細いながらも急な坂がある。ハ、ア此處を下りるんだナと思うたので、足の方向を轉ずる。坂が飽く迄も急な故か、身體がビヨン／＼前へのめる様になつて進む。

下りた所に湯屋があつた、ハテどこか此の邊に洗濯屋がある筈だがときヨロ／＼してゐると、折柄子供を負ふした圖體の大きい子守が湯屋か

ら出て來たので、當つて碎けると許りその風體に依つて別に帽子を脱ぐ丈けの必要なしと思つて、ポケットに兩手を突き込みながら、

「此の邊に洗濯屋がありませんか」

と、ありませんか丈けで子守への敬意を表して問うた、子守は立派な紳士が我々如き風情にありませんか言葉を使つて呉れたこと丈けで既に大なる光榮と心得てか、却つて先方からお辭儀しながら、深厚なる敬意の下に「さア」と小首を傾け、

「さア、私し、私し存じませんが」と、ウロ／＼して、さも氣の毒相な、又申譯のない様な顔をして云ふ。

「左様ですか、どうも困つたナ」

と、己れは獨言して、碌に禮も云はずに其の儘薄暗い小道を何んの考へ





なしに歩いた。

一體男でも女でも他人に道を問ふのに、相手の風采に依つて、その尋ね振りが違ふのは實に怪しからんこつた。己れも今日は其の怪しからん仲間の一になつた。どうも頭の調子が變になつたのか知ら、平生の己れと云つたら、相手が假令小僧でも丁稚でも、そりや一々帽子を脱いでハアハアと敬意の表し方が懇ろを極めてるんだに。

それは嘗つて此麼事を耳にして成る程と思ふたからだ、或る要路の大官が一日大阪へ出張して夕飯後舊友の某氏を散歩がてらに訪ねた、さて友人の住んでゐる町は探しあてたが、何うしても番地が解らない、途方に暮れてゐる所へ、折柄一臺の空車が通つて來たので、

「オイ拾五番地は何の邊だ？」



と、棒の如く突つ立つた儘、懷手をして問うた。すると其の車夫、屹として其の大官を睨み付け、

「帽子を脱がずに他人に物を尋ねる奴があるか、禮知ずッ」

大官はグツと詰まつて了つた、成程一方は大官、一方は車夫、それには身分の上下があるかも知れぬけど、主従の關係がない二人としては全で赤の他人同志である。他人同志であれば他人への言葉としての鄭重さがある。それを「オイ」と呼び、おまけに「何の邊だッ」は全で詰問的だ。車夫のムツとしたのも無理はない。

然し其の大官、早くも成程こりや僕が悪かつたと氣を取り直して、

「やア悪う御座いました」と改めて帽子を脱いで辭を低うして教を乞うた。車夫はニコ／＼して詳しく指示した、斯くて二人は別れた。

それから其の大官が東京へ戻つて、帝國ホテル食堂で、「あんな恥を搔いたことは無い、恐らく僕一生の不覺だつた」と述懐されたので、其れを聽いてゐた多くの貴顯紳士如何にもと領いたが、その大半は耳の痛かつた連中が多かつた相だが、それ以來少くも其の席に列してゐた連中は驚く可き程傲慢を矯めたと云ふ。

己れは其れを又聞きして、他人ごとぢやないと思つた。以つて何よりの範とした。ところが何う云ふものか己れは子守に丈けは何うしても首を下げる氣がしない、何うしてもしない、丁稚にも小僧にも平氣で下げる此の首が、どうしても不思議でならぬ。今でも不可解だ。

○

彼女つまり芳枝さんの姉さんの嫁いでゐる先きは山岡と云つた。



己れは若しや此の邊ぢやあるまいか、いや確かに此の邊に違ひないと思  
うたので、一軒一軒の軒燈を仰ぎ見ては物色した、右にも曲がつた、左  
にも折れた。却々見當らない。最後に「あゝ」と歎息しながら、足を引  
きずる様にして歩いてゐると、とある一軒の二階家の臺所にあつて何  
だか聴いた様な聲がする、オヤと急に立止まつて耳を澄ました。

アツ確かに姉さんの様だ。門を見ると軒燈がない、これぢや幾程この邊  
りを百萬遍歩いたつて解る筈がなかつたのだ、まアい、僥倖だつたと思  
はぬ歡喜に波打たせながら、カラリと開けて、

「御免下さい」と強ひて應揚な發音した。

「ハイ」

あゝ其の聲は愈々確かに綾さん（姉さん）の聲だ。先づ先づ安心の呼吸

を吹いてゐるとサツと襖をあけると同時に電燈の光りが一時に洩れて姿  
が現はれ、

「どなた様で御座いますか」

と、綾さん悉皆奥様聲に變つてゐる、御辭儀の仕方なんか流石有名な賢  
母の育てた丈けあつて堂に入つたものです。

「やア綾さん、僕です、西川です」

すると、幼な友達よくこそ來つれと許り、綾さんの歡喜を罩めた態度  
で、思はず一膝乗り出して、

「まア——、さア——どうぞお入り下さい」

「ハ、今日は此處で失禮します」

と、己れは實は入りたかつたんだけど、何んだか妙にテレて氣恥かし



い様な尻込みする様な變な氣持ちがしたので、斯う云つた。すると、綾さんは、

「いゝぢや御座いませんか さア、さア」と云ひながら、奥の方へグツと首を廻轉して、「貴方や、貴方」と貴重なる旦那様を呼び奉り、

「貴方、西川さんですよ いつも／＼お話し申上げてゐる」

「やア左様か、是非お入りなさいと薦めてくれ」

己れは未だ主人公には逢つたことが無いのだ。

「さア、さア、良人もあの通り申しますから」

と、綾さん巧みに氣勢を唆る可く努力する。

「はア」と己れは未だ妙に羞かみながら、

「芳枝さんゐますか」

「芳枝ですか、ゐますよ、ゐますけど向うの家に置いて貰つてあるんです」と前の家を指さしながら、

「今呼びますから、どうぞお入り下さい」と、赤ん坊を片手に支へて案内する構へして立上り、二階の階段に一步を踏んで「さア、こちらへ」斯うなつたら己れも何時までもお辭儀してゐる性質のものぢやないと思ふたので、「それぢや」と云ひながら敷居に先づ腰を下ろし靴を脱ぎ始めた。すると綾さんは其の間に一散に二階へ駆け上がりながら、電氣のスイッチを捻つたらしい、光りは今度は上からバツと浴せる様に投げられた。

「さア此方へ」と再び聲がする。

「ハア」と云ひながら己れは上がつて行つた。



此處で一寸云ひたいことがある、それはお客さまに自分が坐つた儘で「さア何卒、何卒お入り」と口先許りで云ふ人がある。あれぢや此方が幾程入りたくても入る氣乗りがしないものだ。それを外交の旨い人になると自らが先づ立上がつて奥へ引込み、襖をサツと開けて「さア此方へ」と云ふ。客の心には其の時「あゝまで熱心に薦めるんだもの」と絆される。ツイそれでは一寸丈けと云ひつゝも上がつて了ふ。僅かの呼吸だけで、人情の機微を捉へると云ふことは必要なことだ。この呼吸を綾さんは若いながらも悉皆會得してゐたんだから、世馴れた己れも「お若いに似せぬ」と舌を巻いて了つた、己れが舌を巻くと云ふことはよく〜のことだぞ。

「まア久振りで、よろこそ」

と、綾さんは己れを上座に据ゑ、而かもフンワリとする絹蒲團の上に坐らせながら、自分は遙かに下座に畏まつて、

「まア久振りで、よろこそお出で下さいました。いつも芳枝が厄介になりまして」

「ハア、いゝえ、アノ」

と、己れも負けずに久々での口上を述べようとする、

「又故國の母が度々お慰めのお手紙を頂戴すると申しましてそれは〜いつもお心變りもなく、あんな親切な方はないと申して寄越しますので」

「ハア、いゝえ、アノ」

と、口拙手な己れは先方から先きに口切りをされてシドロモドロになつた上、親切な方だなど、云はれたものだから、そこら邊りがドギマギし



て了つて、「アノ、アノウ」と口切らうとしてゐる裡に又相手の口上が續くので仕方なしにモグモグするばかり。了ひには唯も辭儀さへして居ればいゝと思ふと、唯神妙に兩手をついて「ハッ、ハッ」と畏まつて堅くなつて仕舞つた。

己れ許りぢやない、一體近頃の若い男は本當に挨拶が拙つぺだ、呆れて了ふ、況んや己れときたら、唯さへ口の重いところへ、セツバ詰まつて來ると直ぐ吃みたいに咽喉に云ひたいこと山々が停滯して了つて、却却口先さへ出て來ないんだから泣きたくなつて了ふ。だから、見ろ先方の挨拶口上の時、己れは全で親父に叱られてゐる時の様に、疊へ眼を落した限り、唯「ハッ、ハッ」だ。自分ながら小面憎くなる。綾さんの宅ばかりでない、どこへ行つても己れは此の藝當より外に何も出來やしな

い。だから何時も妻から「本當に横で見ると齒痒くてならぬ。私し何んだか吃の又兵衛を亭主にしてゐる様に思はれて氣が引けて、氣が引けて、その時ばかり貴方の顔を搔き搥つて遣りたくなるわ」と、可憐旦那様を木ッ葉微塵に云ふんだもの。だから己れは自宅にゐてお客さんがお出ですよと云はれる度に、ドキンドキンと飛び上がる。お客さまはいゝが後で妻に又責め付けられることを思ふと、碌々座敷へ足が進みやしない。

□

綾さんが下りて行くと、今度は入替つて山岡權太郎と云ふ嚴めしい姓名を持つた綾さんの可愛いゝゝ此方の方が上がつて來る。今度こそは己れの方が先きんじて遣るぞと、己れは相手が碌々疊の上へ坐らぬ先きか



ら身構へして、一生一代の雄辯振りを發揮して、

「やア始めまして、私は西川と申します、綾さんとも芳枝さんとも小さい時から幼な友達です、お母アさんから至で我が子の様に教育された男です。お名前は豫ねてから雷の如く瀧の如く承はつて居りました、今日は突然、而かも夜分遅くあがりました相済みません、今後ともお見知りおかれませう様偏へに」

と、己れは昨夜帝劇の芝居を見て来た許りの臺詞を挿んで思はず氣が付きこりやア失策つたと聊か赤らむで疊にすり付けた首を擡げると、權太郎さんは却つて「オヤ／＼瓢輕な方だと噂に聽いてゐたに、さても禮義正しき人もあるもの哉」と許り、己れが擦り付けた以上に擦り付けて何も云はずに唯「ハッ、ハッ」

オヤ、オヤ、此の人も矢つ張り口が拙手だと見える哩、海軍○學校教官山岡權太郎の君さへ斯うだから、己れの口拙手もさう／＼悲觀したものぢやないぞ、あゝ世の中は廣い、口拙手が多い。

二ツ三ツ紫檀の机に向ひ合つて話を交はしてゐると、下の玄關が此の時ガラリと開いて、

「アラ、さう？ 他見男さんが？ マア何時？ さう？ 私少つとも知らなかつたわ」

その聲は確かに羊羹二本食つたと書いたのを怒つた妹芳枝さんの聲であると思ふ間もあらせず、トン／＼二階へ上がつて来て、美しい顔をニツとさせながら、

「これは／＼暫らく」



と白い手が疊に溢れた。

「やア芳枝さん！」

と、己れは唯そればかり。いづれ後で悠つくり云ふからとばかりニタリとして見せた。

「先日は大變御馳走さまになりました」  
早速單刀を直入と御座つたナ。

「いゝや何う致しまして」

と、態と面白く受け流して、

「矢つ張り美しいねえ」と眼をキツと張つて見せる。

「オヤ、左様ですか、いつも過分なお言葉を頂戴いたしました」

と、其の手に乗るものかとペンと匆ね退けて了ふ手際の鮮かさ、流石矢





つ張り拔群の成績と教師を驚かした頭丈けあつて云ふことが垢ぬけして  
る哩。

そこへ又綾さんがお茶とお菓子を持つてあがつて来た。

「本當に珍らしいお方が見えたわねえ」

と、芳枝さんを顧みながら云つてから、今度は己れに、茶を勧め、同時に机の上へ菓子鉢を載せながら、

「詰らないものですが、どうぞ」

「ま奥様どうぞお構ひなく」

「まア奥様だなんて」

「だつて奥様ぢやないか、若い美しい奥様ぢやないか」

「相變らずお上手だわねえ」と彼女獨特の笑を見せて、

「これでもう二人の子持岩になつてゐるんですから、若い美しいのと云はれても少つとも響かないことよ、折角ながら御返上します、ホ、ホ、

ホ」

と、姉妹揃ひも揃うて上手いもの。

「オヤ奥様もう二人の子持ですか。ヒエー、貴女は男嫌ひで有名な人ぢやなかつたんですか」

「その男嫌ひの私が人の母になつたんだから妙でせう、改造の世界ですもの、何時までも舊思想に捉はれてゐませんホ、ホ、」

「イヨ一新思想夫人!!」

「協はないわ、とても西川さんには」

「なにを仰しやる、私こそ奥様には」



「奥様々々て厭なことよ。矢つ張り綾さん〜と呼んで貰つた方がなつかし味あじが油然あぶらと湧わいてよ」

「ぢや綾さん」

「オーなつかしい」

「ぢや又昔またむかしの様に歌うたはうか、いゝか、青葉あをば繁しげれる櫻井さくらゐの、里さとの……オヤ合あはさないの？」

「旦那だんなさまを前に置おいて青葉あをば繁しげれるでもないわ」

「如何いかにも御尤ごもつとも。それぢや家庭上かていじやうの話はなしをしませう。どうです昨今さくこんは驚おどろく可べき物價ぶつかげ下落げらくぢやありませんか」

「本當ほんたうにねえ」

「本當ほんたうにねえ」

と姉妹共々あなづまどもどもに合唱がっしやうする。

「さて時に芳枝よしえさん、謹つとんで承うけたまはれ」

「ハッ」と態わざと謹つとしむ眞似まねをする。

「君きみは實じつに怪けしからん、羊羹やうかん二本ほんを食たべたと書かいたのは成程なほほど己おれれが悪わるかつた、然しかし何なにも著書ちやうしょには君きみの本名ほんみやうを書かいてはない、だから誰たれも氣きが附つく筈はずがない、天地てんち知しるもの君きみと僕ぼくばかりだ、それを何故なにゆゑ怒おこつたんだ、怒おこる性質せいしつのものぢやないぢやないか」

「だつて………」

「まだ謹つとんでゐらつしやい」

「仕方しかたがないわ、ハッ」

「それを直接ちやくせつ己おれれに向けむけ云いうて呉くれるのならいざ知らずお母おかアさんに西にし



川さんと絶交だとは其麼美しい顔をしてゐてよくも云つたものだ、取消すかどうかや」

「それは今更残念で御座る」

「なアに残念なことがあるものか、しほらしい婦人なら喜んで取消すかなア」

「私しほらしいくない」

「困つたねえ、實は今日己れは君と和睦する爲め遙々遣つて來たんだ、苦衷を察して呉れても宜さ相なものだ」

「他見男さんに苦衷なんて言葉は用ひられる言葉ぢやないわ、いつもいつものニコ／＼してゐる癖に」

「そりや成程私も悪う御座いました姫君育ちの分際にあられもない羊羹

二本カブリ附た罪は幾重にもお詫びします、奥様のお喰がりになる分丈けでも残して置けば可かつたんですけど、年齢が若いものですから考へが其處まで行き届きませず、お二人の鬱憤遂に私をモデルに執つたんでせう。お蔭で私し悉皆母から叱られて了ひました。お前を育つる茲に十二年、いつ他所で羊羹二本カブリ附けと教へたかと散々お飯も碌々喰べさせず叱り付けられてよ、だから私口惜しくて口惜しくて、到頭お母アさんに西川さんと以後絶交すると申出たんですよ、私こそ私の苦衷を察して下さいと申上げるが當然だわ」

此の時先刻から黙つて聽いてゐた權太郎さんは、

「其の裁判己れがする」とニコ／＼膝を進めて、

「喧嘩兩成敗、孰方も悪い、西川さんは要するに羊羹二本出したのが不



可<sup>け</sup>ない、芳枝<sup>よしえ</sup>さんは又<sup>また</sup>その羊羹<sup>やうかん</sup>二本<sup>ほん</sup>を喰<sup>た</sup>べたのが不可<sup>い</sup>ない、どうです二<sup>ふた</sup>人は之<sup>これ</sup>に服<sup>ふく</sup>しませんか」

「服<sup>ふく</sup>ませうよ」と己<sup>お</sup>れは芳枝<sup>よしえ</sup>さんの顔<sup>かほ</sup>を覗<sup>のぞ</sup>いた。

「えい、ぢや服<sup>ふく</sup>ませうよ」と、直<sup>ただ</sup>ちに二人<sup>ふたり</sup>は妥協<sup>たうけふ</sup>して、裁判長<sup>さいばんちやう</sup>公平<sup>こうへい</sup>とヤンヤと手<sup>て</sup>を叩<sup>たた</sup>くこと一<sup>ひと</sup>しきり。

「芳枝<sup>よしえ</sup>、一寸<sup>ちよつと</sup>」

と、下<sup>した</sup>から綾<sup>あや</sup>さんの聲<sup>こゑ</sup>が此<sup>こ</sup>の時<sup>とき</sup>した。

何時<sup>いつ</sup>の間に綾<sup>あや</sup>さんの姿<sup>すがた</sup>が失<sup>う</sup>せたのか、それは己<sup>お</sup>れには氣<sup>き</sup>が附<sup>つ</sup>かなかつた。屹<sup>きつと</sup>度<sup>と</sup>先<sup>さつ</sup>刻<sup>き</sup>から芳枝<sup>よしえ</sup>さんと夢中<sup>むちゆう</sup>に喋<sup>しゃべ</sup>り續<sup>つ</sup>けてゐる間に下<sup>した</sup>へ用達<sup>ようたし</sup>に下<sup>お</sup>りてゐたんだらう。

「ハイ」と返事<sup>へんじ</sup>輕<sup>かろ</sup>く芳枝<sup>よしえ</sup>さんは下<sup>した</sup>りて行<sup>い</sup>つた、入<sup>い</sup>り換<sup>か</sup>はり綾<sup>あや</sup>さんは下<sup>した</sup>に寢<sup>ね</sup>かしてあつた可愛<sup>かあ</sup>い、當<sup>たう</sup>歳<sup>さい</sup>らしい男<sup>をとこ</sup>の子<sup>こ</sup>を抱<sup>いだ</sup>いて上<sup>あ</sup>がつて來<sup>き</sup>た、己<sup>お</sup>れは一<sup>ひと</sup>眼<sup>め</sup>その子<sup>こ</sup>を見て、

「お父<sup>とう</sup>さんよりもお母<sup>かほ</sup>さんよりもズツ綺麗<sup>きれい</sup>だ、やア出藍<sup>しゆつらん</sup>の譽<sup>はま</sup>れ出藍<sup>しゆつらん</sup>の譽<sup>はま</sup>れ」と賞<sup>は</sup>め稱<sup>たか</sup>めた。

突然<sup>とつぜん</sup>階下<sup>した</sup>で「アレー」と芳枝<sup>よしえ</sup>さんの聲<sup>こゑ</sup>がしたかと思<sup>おも</sup>ふと、ガチャーン、茶碗<sup>ちやわん</sup>が破<sup>やぶ</sup>れる音<sup>おと</sup>が靜<sup>しづ</sup>かな空<sup>くう</sup>氣<sup>き</sup>を震<sup>しん</sup>撼<sup>かん</sup>した。

「どうしたの？」と綾<sup>あや</sup>さんは心配<sup>しんぱい</sup>相<sup>あひ</sup>に腰<sup>こし</sup>を浮<sup>う</sup>かして階下<sup>した</sup>を覗<sup>のぞ</sup>きながら慌<sup>あわ</sup>たしく訊<sup>き</sup>いた。

「姉<sup>あね</sup>さん、困<sup>こま</sup>つたわ」と泣<sup>な</sup>き聲<sup>こゑ</sup>が上<sup>うへ</sup>へ傳<sup>つた</sup>はつて來<sup>く</sup>る。

「どうしたの？」



「お汁粉の鍋を顛覆かへして了つたわ、だつて熱かつたんですもの」

「火傷しなかつた？」

「え、大丈夫」

「ぢやモ一度お拵へ」

「止ませせう姉さん」

「でも折角西川さんに」

その時トーン／＼芳枝さんが上がつて来て、「又羊羹の二の舞になると喧嘩しなくちやならないから、之れを機会に差上ない方が却つて仲よしになつていゝわ、ねえ他見男さん」と云つて今度は姉さんの耳元へ口をピタリと寄せ、

「姉さん實はねお砂糖が悉皆無くなつたの」

## 命の洗濯

「あらッ」

「オヤ」

二人は同時に驚いた。二人とは吉野夫人に己れのことである。

己れと武倉君とが、今日の晝飯は白木屋の食堂にしようと思つて出掛けて来た。食堂内へ入つて「さて何の邊が宜からうと物色してゐる時フト眼に付いたのが吉野君の妻君である。彼女の視線も同時にピタリと己れを射つた、さてこそ「あら」オヤ」である。

己れは瞬間、彼女は何日歸つたんだらうと思ふた。實は先日遊びがてら半込の吉野君の宅を訪ねた所、旦那様はゐらつしやいませんと云ふ、吉



野君ばかりか妻君も子供も居なく、居るのは私ばかりだと女中がしほれた。何うしたんだと訊くと、國許の母が急病と云ふ電報があつたので大急ぎ、取るものも取り敢へず歸國したと云ふ。「ハア左様か」と其れはお氣毒なとも云はず己れは折角久振りで訪ねて來たのにと却つて不服顔して家へ戻つて來た。

それから久闊して又訪ねた。まだ歸つて來ませぬと云ふ。それぢや親が愈々死んだのかと聴くと、いゝえ別に其變報らせもありませぬとある。大分重態になつたのかと又訊くと、さア何うですかと模糊たる返事だ。一體いつ頃歸るんだと二度までも空足を運んだので己れは稍ムツとして顔を見た。

「遅くも二三日の裡でせう、來月の五日頃には屹度歸るからと云つてお

立ちになつたんですから」と云ふ。「さうか」と女中を相手に喧嘩にもならず、此處まで來るのも並大抵ぢやないぞと又も膨れながら歸つた。三度目に今度こそはと行く、矢つ張り居ないと云ふ。そして其の時「奥様が病氣になられたので、旦那様丈けお先きにお歸りになると云ふハガキが參りました」とある。

「奥様が病氣？ フーム、フーム」と又々己れは空足だ。

四度目にもう二人共歸つてゐるだらうと訊ねると、吉野君限りだ。その時吉野君は斯う云つてゐた。

「ねえ西川君、妻がゐないと妻がゐて呉れたらと痛切に總てに不自由を感じずるが、さて一緒にゐるとなると、子供がギヤア／＼云ふ五月蠅なア



と思ふ。要するに一緒なら放れりやいと思ふし、放れてりや一緒ならいと思ふ、夫婦で妙なものだね」

己れは其處に夫婦の妙味があるんだと云つたら、あんまり妙味でも無いぢやないかと吉野君は笑つてゐた。程もなく己れは立ち歸つた。

それから三日後である、今斯うして偶然白木屋の食堂で逢つたのは。

「いつお歸りでした？」

「昨晚かへりました」

「御病氣だつたと云ふんぢやありませんか」

「え、困りましたよ、一時は何うなるかと思ひました」

「もう悉皆よくなりましたか、何病ですか？」

「風邪でしたの、お蔭様で」

吉野夫人にも女の連れがある、醜つともない顔だつたから己れは振向いて遣らなかつた。己れにも武倉君と云ふ連れがある、連れと連れの二人は手持無沙汰だから天井ばかり見てゐた。

「ねえ西川さん、あたし困つたことが出来たんですよ、昨夜一晩中泣き通したの」

「どうしたんです？」

「良人が洋行することになりましたの？」

「洋行？ どこへ？」

「倫敦へ」

「倫敦?! 素敵ぢやないか」

「でも私が素敵ぢやないわ」



「倫敦へ洋行を命ぜられるなんて榮轉だよ、目出度こつたよ」

「え、皆さま左様仰しやつて下さるんですけど」と、一寸口吃りながら

「だつて五年間ですもの！」

「五年でも六年でも良人の爲めならいゝぢやないか、歸れば地位は上るだらうしさ」

「そりや左様かも知れませんが………」

「ぢや奥様淋しいと云ふんですか」

「五年ですもの！」

「平氣ぢやないか」

「平氣ぢやないわ、男て何麼に急に氣が變はるかも知れませんが」

「そりや倫敦には美人が澤山ゐる相だ、殊にピカデリー街の裏町に澤山ゐる相だ。吉野君屹度喜ぶだろて」

「それも心配の一つよ、男て本當に至る所青山があるんですからねえ。

も一つね若し左様云ふことになる私し故郷へ歸らなくぢやならないこととに成つて了ふんですよ」

「故郷へ、あの雨ばかり降る故郷へ」

「え、私しそれが何うしても厭なんですよ！」

「そりや當前よ、ぢや東京にゐたら」

「故郷の親達が承知しません、それに良人も左様なつたら誘惑もあらうからと諾と云ひません」

「ぢや一緒に倫敦へ行けばいゝのに」



「ねえ西川さん、西川さんも左様思うて？」

「左様さ、そして大に世界を見物するのさ、又とない好機會ぢやないか」

「えい、私も左様したいんです、行きたくて行きたくて堪らないんですけど」

「不可ないて？」

「良人が行つた方に訊いたんですつて、そしたら行つて暫らく様子を見て、そのうち呼んだら好からうて。とにかく最初は左様しなくちやと皆さんが仰しやるからと承知して呉れないですよ」

「左様云ふて旨く妻の前は繕ふて、一度び足が外へ出たら屹度赤ンペーだ。窈窕たる金髪美人があいでくくと結羅星の如く控へてゐるんだから、日本に其妻君がゐたかと許りケロリとするに定まつてゐる」

と、吉野君が訊いたら、此奴めがと己れを叩き付ける様な悪い人智慧を妻君に與へると妻君は、

「本當に此處に赤裸々にぶちあけに仰しやつて下さるのは西川さんばかりです、チャンと女の心の奥底へ入つて察して下さるんですもの」

と、己れと云ふ男を其れとはなしに伏し拜み、「外の方つたら唯目出度い目出度いばつかしで眞の同情があるんぢやないんですもの！」

と、目出度いと云つて馳せ參じた連中をギャフンと云はせ、

「ねえ西川さん、何うしたらいいでせう？」

「だからさ貴女が、吉野君に私も一緒に連れて行かなくちや死んでしまいます、あれ氣が狂ひ相です、蝶々が來たゲラ〜、富士山が見えるゲラ〜、ねえ連れて行つて頂戴よつと一生懸命強請むんだね。要するに



私わたしし一分時おんじたりとも貴方あなたを離はなれて私わたしと云いふものがありませんと、濃厚のうこうな所ところを云いふんですね」

「駄目だめよ良人たくは。そんな事ことを聴きいたら屹度きつと、なんだ夫婦ふうふになつて六年はんも経たつぢやないか馬鹿ばかツ、と屹度きつとよ」

「それは宜よろしくないね」

「だからね、西川にしがはさん、西川にしがはさんと良人たくとは大變たいへん仲なかがいゝんですから、貴方あなたから旨うまく私わたしも一緒いっしょに倫敦うんどんへ連れて行くいく様に仰おつしやつて下くださらない？ 後生ごせうですからね、そしたら西川にしがはさん貴方あなたを神かみさまの様に思おもひます。全くまったく本當ほんたうに理解りかいして下くださるのは澤山たくさんのお友達ともだちの中で西川にしがはさん丈だけけですもの  
「  
アレ——。」





「ね、屹度よ、ね、さ私しもう濟みましたからお掛け下さい」  
斯う云つて彼女は椅子を己れに呉れて、身を引いた。

「ぢやお近い裡に」

「いづれ屹度その裡に。……オツと一、一寸」

「え？」

「一寸」

と、猶も近くへ呼び寄せながら、耳たぶを引張らむ許りにして、小さい聲で、

「横の方誰れ？」

すると彼女も負けず劣らずの小さい聲で、

「今度奥様になつた許しの方よ」

「田舎ツペだナ、醜い顔だ」

「でも工學士夫人よ、貴方が醜ないと思ふても、良人の君から見たら此處美人は世の中になんないんですよ」

「そりや左様だナ、失敬」

「さよなら」

彼女は去つて行く。

「誰れだい？」と武倉君が訊く。斯々した夫人で今斯々した話をしてゐたんだと云つたら、

「女として無理からん事だね」と同情して、「然し僕なら何うしても連れて行かないね」と云つて、「偶にや命の洗濯しなくちや!!」

斯う云ふ量見の男が今の世に多い、恥かしい話だけど僕もその一人だ。



而かも其の僕が吉野君に妻君を引張つて行けと早晚忠告に出かけようてんだから沙汰の限りだ。

## 芳子さん

又そろ／＼己れの癖が出て来た。

又しても斯くフイと出て来て了つた。

己れは何かの拙著で書いた如く、豫め日を定めて旅に出ることが大嫌ひだフイと思ひ立ち、フイと飛び出すことが大好きだ。

昨日も雨がザア／＼降つてゐたが、何んだか急に箱根へ行きたくなつたので友人の誰れ彼れなしに「どうだ一緒に行かないか」と勧めて見たが彼等はあまりの突然さに眼を丸くして、何を云ひ出すんだいと呆氣に取られて、正氣の沙汰にして呉れぬ。ぢや一つ岡崎さんを引つ張り出さるかナと思ふた。岡崎さんと云ふは本屋の主人である。先日逢つた時「先



生、近い裡に鹽原か鶴沼へ遊びに行きませうよ、偶には頭腦がカラリとしなくちや。毎日あくせく堪まつたものぢやない」と己れに潘してゐたから、旅行なら大賛成だ、いつでも行きませうと其の時答へて置いた。それを急に思ひ出した。

早速電話をかけて見る、幸ひ主人公ゐた。

「岡崎さんですか、どうです今から箱根へ行きませんか？」

「えッ、箱根へ？」

と、之も突然なので、呆氣に取られたらしく、

「先生の仰言ふことは何日も晴天の霹靂ですから、脅かされますよ」

「行きませんか、久々で湯の香りも格別ですよ、ボカ／＼と何んとも云へぬ好い氣持ちだらうと思ひます、それに……」

「オツと待、待つて下さい、そんなに機能を並べ立てられると、ツイ浮となつて家の大事な用事も何もかも忘れて飛び出してしましますから……せめて一日前に豫告して下さいつたら、好かつたのに」

「豫告なしで突然である所に興味津々たるものがあるぢやありませんか」

「そりや左様ですが、先生の様な楽な身體と違ふ丈けに直ぐ出掛けると云ふことが一寸面倒ですよ」

と、兎もすれば「折角のお誘ひですが」と出兼ね間敷返事だ。素破大變だと思ふたので、「行きませう、行きませう、箱根の溪流に耳を濟まし裕衣がけで恍惚する刹那の氣持ちつたら、素敵ですよ」

「そりや左様ですなえ——」



と、旗色次第に近づいて、

「それぢや後二時間程お待ち下さいませんか、それまでに用事が済めばお供しますから」

到頭浴衣がけに参つて了つた。己れはもうめめた、先づいゝ鹽梅だつた。もうスンでのごとで、孤獨の淋しさと云ふ様な碌でもない顔付して一人で出かけるんだつた、とホツとした。

雨は益々降つた、強く降つた、何糞々々と己れは時々窓から首を外へ出しながら、チエツ／＼と舌打ちしては對抗の氣勢を上げた。

二時間は束の間に過ぎて、更に過ぐることに十分、岡崎さんからチリンチリンときた、己れは受話機を執つた。

「アノウ、先生で御座いますか」

奥様の聲だ。

「ハア」

「良人は今日は何うしても手放しが出来ぬと申しまして、折角のお誘ひですがお断はり申上げて呉れと云ふてますから、大變御親切は有難う御座いますか」

「……………」

當が總つかり外れた電話だつたから、己れは斯う聞いた突嗟、ハテそれぢや何うしようか知らと受話機を耳にしてゐるのも忘れて思案に耽つた。

「モシ、モシ」

「ハア？」



「お分りになりましたか」

と、奥様は己れが黙つてゐるので、電話が切れたのぢや無いかと驚いてモシ／＼と呼びハアと返事したので、それぢや切れてゐないのだと頷づいて、お分りになりましたかと返事の催促だ。己れは思案から愕然としておのれに歸つた。

「ハア分りました」

「本當に済みません」

「何う致しまして」

電話は切れた。切れてから始めて、今どんな會話をしたのかとボカーンとした。何んだ行かないのか、それぢや己れ一人かと投げ出す様に呟やくと同時に凄い雨の唸りが硝子も破れよと許り窓を叩いた。

愈々一人かナと改めて又思ふた。

雨更に強い。

止めよかナと思ふた。

己れは頭腦に手を載せた儘黙然とした。

今日も亦家へ歸つて千遍一律の様に飯を喰つて、静子(四歳)の相手になつて毎日同じ様な話を交はして、そして寝るのかと思ふと、ツク／＼厭になる、原稿も此の一ヶ月ばかりはテンデ書きたくなし、書きたい氣乗りもせず、だと云ふて又芝居も見たくなし、精養軒も飽いたし、日本料理は好まぬし、訪問して見たいと思ふ友らしい友はなし、戀人も居らず近頃一として己れの好奇心をムラ／＼と起させるものがありやしない。全で斯うなると己れも神経衰弱に罹つた様だ。本當に飛び切りの美人が



突然己れに「他見男さんッ」と獅噛み付いて呉れないか知ら。そしたら己れは晴れやかな笑みを浮べるであらうに。白い腕に靠れて歌でも唱うだらうに、それが居ない。

淋しいのだ、己れは何んだか淋しいのだ。

此の広い東京、此の華やかな東京、此の歡樂の東京、己れはもう總てを盡して了つた。己れは新しい何かを求めなくちやならぬ。

その想ひが、フイと日もあらうに此の雨の日に突發して來たのかも知れない、イヤまだ一つ隠してゐた原因がある。

今から一週間前、己れの家を訪ねて來た峰子と云ふ優しい若い女がゐた。

その女が「ねえ先生實は先生に逢ひたいと云ふ令嬢達が澤山あるんですが、逢つて下さいますか」と訊いた。「どつちでもいい」と己れは其の時

答へて置いた、それから二日後、己は彼女から一通の手紙を受取つた。

「總勢八人、今度の日曜には鶴見の花月園へ行きます、皆他見男さんを見たい逢ひたいと思ふ方ばかりです。先生來て下さいますか、どうか被居して下さる様に。八人を失望させ遊ばさざる様に」

と書いてあつた。其の手紙を受取る頃、己れはもう一遍若い華かな氣持になりたいと思ふてゐた矢先だつたから、大喜びで「行くとも、行くとも」と書いて出した。折返し日と時間、それに待合はす場所とが詳しく記されたハガキが己れを訪づれて來た時、己れは若い血汐に圍まれる異常の感激に高鳴つた、漸次日と共に、月と共に、否年齢と共に己れは若きものから遠ざかつて、次第に老性振り、次第に打ち去られて行くのが譬へなき悲しみであつた、淋しさであつた。せめて何もかも打ち忘



れて心ゆく許り若き享樂の中に一時間なりとも一日なりとも魂を浸し  
たかつた。そこへ此の福音が訪づれて來たのだ。己れは人知れず感謝し  
て日を待った。

然るに突然今朝になつて峰子さんから「止むを得ざることがあつて明日  
曜の鶴見行きは中止することになりました、何れ日を改めて行きますか  
ら、その時まで何うぞお許し下さいませ」と、あつた。

それを讀んだ刹那、己れは高い頂から一時に谷底へ蹴落された様な失  
望を感じた。明日の日曜は口にくそ出さね、如何に待ち構へてゐた喜び  
であつたらう、その喜びがあと方もなく影を潜めて行つたのだ。晝かれ  
し歡樂も秘められし歌も總ては姿を隠して了つたのだ。己れは暫らく呆

として了つた。ツクト何事も厭になつた、さてこそ急に旅を思ひ出し  
たものらしい、それが動機としか思へない。

要するに色んなことが己れをしてムカ／＼させたに違ひない。  
然し折角の此の提案も一人の賛成者なく、加ふるに強雨益々凄まじきに  
流石の己れも悉皆氣を腐らして、到頭とぼ／＼と家へ歸つて了つた。(以  
上品川國府津間の列車中にて書く)

□

斯して翌日を迎へた。上天氣も上天氣、驚く可き許り空は晴れた、「空も  
港も雲晴れて」の朗々たる歌が思ひ出される程氣持のカラリとする空  
だ。而かも此の上天氣の日に何等の目的もないのだ、何んと云ふ残念さ  
であらう、あゝ此處ことなら何故昨日雨を犯してまでも出立しなかつた



のか、そしたら箱根は今朝霧が谷間から次第に晴れ上つたらうに。あの  
 真白い霧がかすみの如く山をこめてゐる様は實に得も云はれないのだ、  
 到頭己れは遁して了つた。

「實は昨日箱根へ行くんだつたに！」

と、己れは思はず餘憤を洩らして、一箸飯を口へ入れた。

「箱根へ？ 左様？ ゐらつしやれば好かつたに」

と、平生なら自分も連れて行かなきゃと止め言葉を云ふ筈の妻までが、  
 惜し相に云ふ。斯うなると益々氣が苛立つのみだ。

「だつて雨だつたから今日も降り續けられると思はれんだよ」

「でも此麼いゝ天氣ぢやありませんか、惜しいわねえ——」

と、本當に惜し相に云ふ。己れは又空を見上げた、實に風もない。

「今から行つて被居いな、行きませうか」

「さア——」

己れは口をつぐんで了つた。そして心の中で妻なんか連れて行つて何が  
 面白いと思ふた。飯が終つて座敷をブラ／＼して見たり、書齋へ座つて  
 見たりしたが、何んだか落付かぬ、了ひには譯なく腹立たしくなつて、  
 己れは茶の間に座蒲團を重ねてある所へ、控つかと頭を載せて煙草を脚  
 へながら煙をバツ／＼吹いた。

「貴方、静子を連れて何處かへ遊びに行つてゐらつしやいな」

「……………」

妻はプツと噴き出して、

「少つとも返事しないのね、貴方でも私でも自分の意志が通らないと直





ぐヒステリーになるのね、よく似てるわ  
と、愈々フキ出して、

「一家の旦那様が其麼様子をしてゐると、氣の毒になつて堪らないわ、  
同情してよ」

「……………」

返事するさへ己れは物煩さかつたから、飽く迄も沈黙を續けた。そして  
又立ち上がった。ブラリ、ブラリ大きな男は部屋を歩いた擧句又もや仕  
方なしに書齋の椅子に腰を下ろした。

「貴方、貴方」

と、庭から妻が呼んだ、又乾物の棹でも取つて呉れと云ふんだらうと思  
ふて、己れは返事しないでゐた。



「貴方つてたら」

と、再び呼ぶ聲は何うも乾物棹らしく無かつたから、何んだらうと立上がつた拍子に、三度び妻の聲は己れを訪づれた。

「貴方、鈴木さんの小父ちゃんよ」

「オウ、左様か」

と云つて、座敷を通つて庭へ出ると、隣の鈴木君が、いつ、いつ、笑つて立つてゐる。

「やア」

「寫眞を撮るよ」

「ホウ寫眞機械を持つてゐる？」

「そーら」

と、ポケット用を翳して見せて、

「お父さんと静子ちゃんと寫すから、そこへ座つて呉れ」

と、縁側を指示する。

「オイ静子ちゃん」

と、己れは大きな聲を出してその邊にゐるだらうと試みに呼んで見ると

「ハイ」

と、我が子静子はチョコ／＼走つて來た。

「隣の小父ちゃんがね、お寫眞を撮るて、さアさアお父ちゃんの傍へお出で」

と手を差伸べると、静子ちゃん妙に羞恥かむ風情するから、

「何うしたんだい？」



と、訊くと、

「恥かちよ」

と、顎を引く。

「なアに、何も恥かしくない。オイ我が子」

「我が子」

と、静子とシツペイ返しした。己れは時々静子を我が子ツと云ふ、静子も面白がつて「ハアイ我が子」と答へる。

「さアお出でつたら」

と、己れは優しい慈父聲を出して静子を麾いた。

「そんな所で寫すよりか此の椅子を庭へ出してそれに腰かけて寫したら何う？ 何々伯爵家庭見たいだわ」

と、傍から妻が口を出した。

「ウンそれが堂々と好いかも知れぬ、ぢや」

と云ひながら、己れは縁側の隅に置いてあつた籐椅子を庭へ下ろした。

「さア静子、お父ちやんに抱つこ」

と云ひながら、両手を差出すと、静子は折角我が父があれ程優しく云つて呉れるのに、之れ以上拒絶するのも禮に非ずと思ふたか、走り付いた。椅子に腰を下ろして、

「さア、何時でも」

と、己れは身構へた。然るに静子は急に後を向いて了つた。

「後を向いちや黙目だよ、前を見なくちや」

「しゃアよ」



と、彼女は羞恥かむだ、時々此の子は妙な所で羞恥かむ癖がある。矢つ張り己れに似たのかナ。

「後を向いてると却つて顔が寫るんだよ、前へ向くと寫らない」と、旨いこと云つて欺したら「さう？」と變な顔をして慌て、顔を正面にした所を、ビシヤンと撮られて了つた。見てゐた妻の話に依ると、己れも静子も共々に鮫鱈の様な口を開けてゐたと云ふ。  
家の中へ入れくと薦めたけど、隣の小父ちゃんは今から何處かへ遊びに行くのか惶惶と又裏門から出て行つて了つた。此の間ホンの五分間ばかり己れの頭から「旅」と云ふものが放れてゐたが、彼の姿が見えなくなるると同時にムクムク又首を上げて來たが、また機が熟さなかつた。  
フト雨に濡れて汚なく穢れてゐる靴が玄關の隅に投げ出されてゐるのに





氣が附いた。己れはどれ磨いて見ようかなと云ふ殊勝な心掛けが萌した。

「磨く、己れは靴を磨く」

と、一寸詩みたいな事を云つて、靴を持って立上つた。そして縁側へ來た。「左様だ、静子の分も磨いてやれ」と再び玄關へ來て静子の可愛い靴も持つて來た。

「貴方、靴をお磨きになるの、まあ珍らしい、道理でお天氣がいい、筈だ」と、妻は横から冷評かす。全く己れが靴を磨くとは一寸一年振りの感がある。

「矢つ張り貴方は何處までも氣紛れ者だわねえ——」  
と、妻はツクツク親愛なる良人の顔を見上げて、

「あまり珍らしいから何が旨味しいお菓子でも買つて來てあげませう

か」

と笑つて見てゐた。

「父うちやん静子ちゃんのお靴も磨いて頂戴ね」

と、此の時静子は自分の靴も一人前に並べられてあつたので、流石に歡喜禁じ得なかつたのか、念を押してみた。

「よし、よし」

と、己れは物には順序あり、先づそれお父さんからと、おのれの靴に最先きに靴墨をぬり、それから我が子に及んだ。静子はお父さんは利己主義だなアと許り顔をふくらがして見てゐた。

それにも係はらずいざ磨くに當つて、己れは矢つ張り己れの靴から先さにした。



「静子ちゃんのも磨いて頂戴よッ、よッ」  
と父は子を慈しむの道を知らずと許り静子は催促した。

「お待ちよ、之を磨いてからね、ね」

と、己れは自分の靴を磨き／＼云つた。

「不可ないよ、不可ない父ちゃん」

と云ひながら、もう／＼父が其の根性なら強ひて私は父を依頼せぬと許り、新たに奥の方から赤い布を持つて来た、そして其れに靴墨を塗らうとする時、

「静子ちゃん、不可ませんよッ、それは静子ちゃんの半襟ぢやありませんか」

と、突然妻が静子の頭の上で怒鳴つた、父と云ひ母と云ひ何んと私に痛

痛しく當るんだらうと許り静子はわーッと泣き出しかけた、その時己れは己れの分を磨き終つたから、隙さず、

「さア、さア静子ちゃんのを磨いて上げますよ」

と、早くも危い所で涙を止めて了つた。

静子の靴は全く可愛い、静子も亦その靴が嬉しくて／＼堪らないのだ。静子に靴を買つて遣らなくちや／＼と云ふことは外へ出る度に我々夫婦の間に提唱された案であつたが、何日も愚圖々々になつて了つてゐた、尤ともゴムの靴は以前から持つてゐたが、兎もすれば足が滑り出て了ふので却つて下駄を履いてゐるより不便が多かつたので何日しか仕舞ひ込まれてあつた。

所が先日我々夫婦は破天荒にも静子に洋服を買つて遣らうと相談仕合つ



て、銀座の關口に出張に及び素敵な洋服を買つた序に、同じく其處にあつた小さい皮の赤靴を求めて遣つた。それは驚く可き高價だつたけど、我が子の喜びには代へられなかつた。静子はビヨン／＼銀座の町を喜んだ。

その靴が之である。

靴は美しく磨かれた。(以上小田原輕便停留場前さかい屋待合所にて)

□

己れは靴の色を見て一種の誘惑を覺えた、見よ餘りに綺麗に且つ見事に磨かれたぢやないか、己れは繁々と思入つた、急に履いて見たくなつた。何だか外へ出る、飛び出せ飛び出せと囁く様に思はれて仕方がなかつた。己れは恰んど夢幻的にフラ／＼と書齋へ入つて、旅行鞆を取出し

それに原稿用紙とアテナインキを入れた。

突然高く「それッ行けッ??」と叫んだ。

縁側へ来て、己れは妻にだしぬけに、

「箱根へ行く、箱根へッ」

と、軒昂として宣言した。

「まア今から?」

「今からでも何んでも行かうと思ふた時に行く」

「行つてゐらつしやい」

許可證は鮮かに下りた。

「私も一緒に行きましょか、一寸待つて戴けば用意しますわ」

「御免だッ」



と一舉に己れは振り放つて了つた。妻は「ぢや勝手になさいな」と云ふ顔をした。

「父うちやん何處へ行くの」

と、愛嬢静子も此の時又隙あらば己れに獅噛み付いて一緒に連れて行かなくちや泣いて見せますよと許り顔色をヂツと見上げた。

「父うちやんね、そらエーと、そら學校へ行くんだよ」

「左様？ 本當？ 本當に學校？」

「ウン學校」

「……………」

彼女はそれ以上己れを追窮しなかつた、静子は己れが何日も外へ出る時、學校へ行くと教へてある、だから學校とさへ云へば自分は連れられ

ないものと覺悟してゐる。己れは都合の悪い時には何日も静子に此の學校を振り廻はして彼女の連行を妨げてゐる。今も其の手を利用したんだ。

「母ちゃん、父ちゃん學校？」

と、どちらも様子が怪しいと見てとつてか彼女は眞偽を確む可く母に聞いた。

「左様よ父ちゃんはね學校へ行くんですよ」

と、父母諸共我が子に虚偽を傳へた、何うも教育方針が悪い、鳩山春子さんに知れたら屹度そんな子供の育て方としては駄目ぢやありませんかと叱り飛ばされるであらう。

素早く洋服を着た。そして鞆を下げて玄關へ來た。

「全で其の様子は醫者さま見たいだわ、鞆なんかお止しなさいな」



と、妻は忠告を與へた。

「醜いから？」

「變だわ、可笑しいわ」

「ぢや止さうか」

「およしなさいな」

「それぢや止す」

と、答へながら、急に鞆から原稿用紙を取り出して洋服の内ポケットに挿込んだ、インキは外のポケットに壊れたら大變だぞと思ひ／＼突き込ん  
で了つた。

「之でいゝかい？」

と氣を附けの姿勢を作つて見せた。

「立派だわ」

と、女房儀正に良人を賞めて呉れた。

靴を履いた。革滑めらかに、足は吸ひ込まれる様に入つた。

立上つた。

「行つてゐらつしやう」

と態とらしくうや／＼しく妻は兩手を突いて見せる。日頃のない素振りだ。

「さ、静子ちゃんもお手々を突いて、父ちゃん左様ならを云ふんですよ」  
と、妻はポカンと立つてゐる静子に教へた、今度は春子さんに賞められ  
るだらう。静子は妻のなすが如く兩手を突いた、そして叮嚀に御辭儀し  
た。